



外科新書
 遠西果冷士著
 坤

特別
 9
 920
 2



1942

1942

門 70
920
卷 1

外科新書卷四

遠西

雅骨弗斯不冷吉

撰著

西肥

永保吉雄權之助

譯述

腫瘍編

○第五章水様腫篇

第一章總論

此症ハ凡テ水ノ滿聚メ起発スル処ノ者ヲ



指テ云ナリ○此症ヲ分別スレハ九種アリ即
 其一 脹腫
 其二 勿^ム腫
 其三 水腫
 其四 常水腫
 其五 頭水
 其六 脊椎破裂
 其七 胸水
 其八 腹水
 其九 關節腫^リ等^ニ

第二章 脹腫

此症ハ其色白ク痛サル者ニメ^メ
 軟痛アル^{コト}
 又^モ其腫^ニ軟柔^ニメ^メ指^ニテ^テ推^シ片^ハ暫^ク間^ク凹^ク

陷スル者ナリ○此症ハマニト及腕ニ起ルヨリ
 ハ足腫^脚及股ニ起ル者多○此近^ク因^ルハ其患^ル處
 ニアル水脉ノ運行ヲ妨障セラレテ或又粘^ス液^ム
 様^アノ水カ此蜂^ア巢^シ状^クノ鐵^セ維^ル内^ニ溢^ス入^ルスルヨリ
 起^ル因^ルスル者ナリ○此症ヲ即粘^ス液^ム腫^トト名^テ可^ク
 ナリ○此症ヲ區別スレハ寒^ク癩^クノ兩症アリ
 ○其寒^ク症^ノ者ハ指^ニテ^テ推^シ片^ハ暫^ク凹^ク陷^スシ
 色蒼色ニメ痛マサル寒^ク冷^クノ者^ニ○其^ハ癩^ク症^ノ
 ノ者モ寒^ク冷^クノ如ク蒼白色ナレ^ド然^レシ^ド痛^ム

有テ自傷ノ^ハ濕氣ヨリノハ燧ナル者ナリ

此治療其寒ニ症ノ者ニ於テハ

一 引イテレーヌニテ「ノ卷木綿ヲ以テスベシ

ニ 強杜ニメ醜解スル処ノ蒸劑ヲ以テス即其方

白灰水ニ樟脳精ヲ加ヘタル者或赤葡萄

酒ニ明礬ヲ加タル者或頭根等之

三 食塩尻根ヲ交混メ布袋ニモリ患處

ニ貼スベシ

四 神経軟膏ニ樟脳ヲ加テ摩擦スベシ

五 乳香ヲ以テ薰シタル木綿ニテ摩擦ス

内服ニハ「アルニガ」花ノ煎けニ「ヲキシメル」コロキイ

ヲ十六支加タル者日々ニ「セニト」宛テスベシ

若此治療効ヲ奏サルハ「予」カヲトリ其患處

ニ乱刺シ或癩泡膏ヲ貼傳スベシ

○若其歳

月ヲ怪タル脹腫ニメ甚タ辛辣ナル液ヲ漏

出スル者ニハ必ス刀痕及癩泡膏ヲ施テ勿レ

動ハ死痺ヲ起発ル者ナリ

○其熱ニ症ノ者ニ於テハ歛痛腫ノ治法ヲ以テ療スベシ

第三章「ウエ」腫

此症ハ稀痰ニメ鹹味アル後ヲ含畜スル
処ノ腫ナリ。○此症モ亦脹腫ノ如ク寒熱
ノ両症ニ分別スルナリ。○其寒症ノ者ノ微
候ハ色蒼白ニメ寒冷レ痛ミナク弾カアル腫
ニメ指ニテ推ハ凹陷セサル者也。○其熱症ノ
者ノ微候ハ熱メ痛ヲ発シ且ツ前症ト
同ク弾カアル腫ニテ黄色ニメ女青ヲ帯
者之是以テ「ロース」ト見誤サル様ニスメリ即

「ロース」ハ黄色ヲ帯ル紅色ノ者也。○此症ハ都
テ金創潰傷、骨損傷、挫傷、菌痛^{キミルボツ}、
等ニ於テ其初発ニ炊痛有テヨリ續キ発
者也或時トメ体中ノ蒸発気閉塞メヨリ起
発スル者アリ殊ニ顔面ニ於テハ多ク閉塞シ
タル蒸気ヨリ起発スル者ナリ。○平常ノ
「ウエ」カ脂肪膜ノ蜂巢状ノ織維中ニ溢
入スルヨリ起発スル寒症ノ者ハ寒^脹腫ノ
治法ヲ以テ療スメリ。○若シ此ニ及メテ

辣成「ウエ」ヨリ起発スル熱症ノ者ハ熱
脹腫ノ治法ニテ治シ而清涼ノ下劑ヲ与
中ハ宜トス

第四章 水腫瘍

此症ハ一箇ノ水脈ノ破裂ヨリ起発スル者
ナリ○此症分別スレハ三種アリ即昌腫
膿腫破潰腫等ナリ○其昌腫ノ徵ハ白
ノ凹ク痛マス弾カレ腫ナリ○此症ノ
皮色ハ変セヌ其大サ「キユルテ」鐵或「女

一ト此同ノ如クニメ或一年モ一向変移スル
ヲ無キ処ノ者也○其膿腫ノ徵ハ其時ヲ
経テ後腫熱ヲ増益シ疼痛ヲ発起シ而
自然ニ任セ弃置スル亦緩和劑ヲ施テモ
必紅黄色或淡黄ニ成者ナリ○其破潰
ノ徵ハ瘡腫ノ縁其中ニ向テ伏在セシ色
萎青ニメ水氣ヲ含蓄シ凹穴ト成リ而
其処ヨリ稀薄ナル膿様ノ液ヲ絶ス漏出
シ而二三ヶ月ヲ経タル後ニハ同患者真ノ

勞瘵病ニ陷落ノ死者也○此三種ノ発処
ハ何ニ部々ニテモ都テ水脈ノ多ク在ル処ナ
リ即股上腕腎腰胸脊等ナリ○此近
因ハ水脈ノ破裂或チ毒液ニ侵蝕セラ
レタルヨリ致ス者ナリ○予間小兒痘後
或金創後或壞血病ノ人等ニ於テ此症
発起スルヲ目撃シタリ○痘後ノ者ニ
於テハ漏出スル処ノ液其性ノ変セサ
ル者ニ○金創後ノ者ニ於テハ其液腐

敗シテ漏出スル者ナリ○壞血病ノ者ニ
於テハ其液腐敗タル者ト腐敗セザル者
ト交混メ流出スルナリ依テ甚ク身体氣
カラ減スル者ニ

此治法

- 一 カヲ取テ瘡底ニ至ル迄開割スベシ
- 二 テイデシ君ノ金創水ヲ施ス附貼ス保
傳スベシ
- 三 若シ其開割ノ処ニ海綿状ノ肉生シ

夕ル片ハ丹若ト樟腦トメ未ヲ其肉ニ分師
掛メシ

内服ニハ樟腦無皮ヲ乳^乳汁ニ共メシ

第五章水腫

此症ハ身体ノ總上皮膚腫脹スル水腫ニメ總
身水腫ト名ケ或身體腫ト名ル也○此治療
ハアムニカ^カ止花ノ色浸ニヲキレメル^コユルキレ^レヲ
加ヘ夕ル者ヲ共片ハ治也○間又踝ノ周
圍ニ刀ヲ下メ乱刺スル^一要術ナリ

第六章頭水

此症ハ頭ニ水液溜聚メ身體ヲ比較スルハ
最モ巨大ナル者ヲ指テ云ナリ○此症ヲ
分別スレハ内外ノ二症アリ○其外症ノ
者ハ頭蓋骨ノ外ニ液ノ自然ニ流出メ
溜聚スル者ヲ云則其徵ハ試ニ指ヲ以テ
推片ハ其処暫ク陷凹或者也○其内症ノ
者ハ腦蓋骨内ニ液ノ溜留メラル者也即其
徵ハ外症ノ者ニ及メ指ニテ推テモ陷凹ナラ

及腦蓋血ノ周圍著ク巨大ニナリ
腦蓋合縫ヨリ頭臚兩方ニ裂開シ患者ヲメ五管
甚々疎カナラシム者ナリ

此治療ニ於テハ外症ノ者ハ治ルヲ得レ
凡内症ノ者ハ治ルヲ能ク其外症ノ者
ノ治法ハ

其一 強壯蒸劑

其二 強壯ニスル軟膏

其三 項ニカヲ下メ乱刺スルヲ

其四 項ニ癸泡劑ヲ傳貼スルヲ

其五 アルニカ山花ノ色浸ニ「ヲキセメルコルキレ」
ヲ加タル者

内症ノ者ニ前ノ五法ヲ用ルヲ或称ス
レ氏効アラヌ且ツ「テレパア」ニラ以テ腦蓋血
ヲ突刺スルヲ功ナキ而已ニアラヌ間死ニ
至ラシムルヲヲ至ス者有也

第七章 脊推破裂

此症ハ脊髓ノ水腫ニメ脊推ノ一二カ太脱離

肉スル者ヲ云也○此症ハ天受ニメ多ク内
症ノ頭水~~液~~ニ關係スル者也○此症ノ癢
処ハ多ク~~腰~~腰椎ニ有者ナリ○此症ノ微ハ
脊推ノ処ニ軟ニメ彈カアル腫ヲ生メ其
腫ノ兩傍ニ各一箇ノ者添テ横ニ突出ス
ルナリ而メ下肢不遂シ及小便自利スル者
也○此症ハ不治ノ者ニメ~~後~~脊推ニカ
痕ヲ付ル~~凡~~亦益ナシ故ニ病ヲメ~~癢~~セザ
ラシメル様ニ只能ク保之護シ置~~置~~ベシ

第七章 胸水

此症ハ胸ノ空隙中ニ水ノ溜止スル者ヲ云
○此症ヲ分別スレハ平常ノ者ト~~癢~~癰閉ノ者
トニ症アリ○其平常ノ者トハ胸腔ニ水
ノ溢聚スル者ナリ○其癰閉ノ者トハ
水液カ胸膜ノ蜂巢状ノ纖維中ニ聚溜
スル者ナリ○凡テ此症ハ呼吸塞迫シ
眼色~~青~~青白ニメ手ニ水腫状ノ腫ヲ~~癢~~起ス
ル者也

此治療ニ於テ若シ「アルニカ」花ノ色浸け
ニ「ヲキシメルコルキレ」ヲ加用メモ功無シ我
又曰「ニユムレキユリ」千五匹ニ「アロマチ」匠
ヲ加ヘタル莖葉。及脚湯法ヲ以テ兼用ス
トム患氏亦効ヲ奏セザルハ。穴穿胸術ヲ
処セスニハアルヘカラサルナリ

第八十章 腹水

此症ハ腹腔中ニ水溢入シ或^{ビユキキリス}腹膜蜂巢
状ノ組織中ニ水ノ粘溜スル者ナリ。○

此症モ亦胸水ノ如ク平常ノ者ト瘰閉
ノ者トノ兩症ニ分別スルナリ。○其平常
ノ者ト腹腔ニ水ノ溢溜スル者ナリ。○其
瘰閉ノ者ハ腹膜蜂巢状ノ組織中ニ水
溜聚シ或内藏ノ表膜ニ水包様ノ者ヲ
発シテ潑溜スル者ナリ。○其平常ノ
者ノ徴ハ腹疼ク腫凹凸高低ニメ不平
ナリ。其腫カ漸クト増益シ此ヲ撫按ス
ハ液皮スル者ナリ。○其瘰閉ノ者ノ徴ハ

一部之ニ限リテノ面ノ格別痛ナキ腫ニメ
其腫ノ容ナキ手常ノ腹水或他腫ノ兜^{不鮮或容}
ナトハ少異ナリ。此治療ニ於テ若シ利
水劑ヲ持重ニ用テ功無クハ腹ヲ穿貫
メ水ヲ流出セシムルニ努ム此術ニテモ毎
治スルノ難ク且ツ時トメ不恰ナリ

第九言早關節水腫

此症ハ關節凹陷中ニ關節液ノ溜聚シ
或關節ノ韌帶ノ蜂巢狀ノ組織中ニ

容ノ如ク
んタ以テ
ヲ檢トス

レ一トハ

水液溜聚メ発起スル者也○此等常ノ発
所ハ膝節ニ多シトス○此症ヲ分別スレハ
直ハノ者不直ハノ者新及径久ノ者ノ四症
アリ○其直ハノ關節ノ凹処ニ及テハ有ナリ
而此症カ膝節ニ及テハ膝頭分外ニ大ク
ナリ膝蓋骨カ腫ノ為ニ外ニ押出サレ且ツ
其ハ腫ハ柔軟ニテ弾力有テ指ニテ推テ
モ陷凹ナラヌ腫内液有テ皮色変サレ
者ナリ此症初起ニハ痛ミ少ク屈伸シ

難クメ後ニハ又漸々増劇痛ヲ発シ全ク
 屈伸スルヲ得サルナリ○其ハ不直ハノ者ハ
 關節骨ヲ纏絡スル靱帶ノ内ニ溜聚メ
 発スル者ナリ而此症カ膝節ニ発スルキ
 ハ膝ノ周圍一面ニ膨脹シ膝蓋骨ヲ外
 方ニ排出セヌ其症直ハノ者ヨリハ疼痛
 及彈カ少ク指ヲ以テ押付ハ凹陷ニ成也
 ○此症ハ液波スルヲ以テ他ノ關節強ク
 直ハ症ト異クヲ看得シ且彼ノ強直症ニ

添フ処ノ腫ハ此症ノ如ク大起セヌメ至テノ
 堅硬成也○此治療ニ於テハ其初発ニハ下
 條ノ數方ニテ時トメ治ルヲ得ナリ
 一 強壯ニメ燂餅スル蓼葉即其方
 赤楠桃酒或酢或尿或灰水ニ硃石又ハ
 樟腦又「カハルモニヤツク」ヲ加ヘタル者等ニ
 二 寒水ノ「トロフ」ミ子ヲ「ル」水鉄氣ノ等用
 三 野苧桃根ニ酢アヤノト塩ソルトトヲ加ヘ搗碎メ粉
 劑トス

四 鉄丸ノ多キ墻堤ノエヲ貯得ス
五 内服ニハ疏條劑及アルニカシ花ノ色侵
ニ「ヲキシメルコルギン」ヲ加ヘタル者ヲ其
若シ此劑功ナキハ穴穿開ノ留聚スル水ヲ
決導スベシ○此穿開ノ法ハ全大カラサル
樣ニ關節ノ凹陷ノ処々ニ至ル迄穿通スベシ
其穿処ハ膝上ノ外傷ニアル平常ノ節様
ト兩頭筋トノ間ヲ宜トス○其穿開ノ口ヨ
リ留聚ノ水流シ出シタル後ハ強キ「カスカヒ

膏ニテ外氣ヲ製入セザル様ニ掩覆メ防禦
スベシ○此症ニ水鏡術ヲ施シ殊ニ害アリ
強心ニスル葦劑ハ甚効アリ
若シ怪久シタル者ニ於テハ其節ノ諸骨
已ニ腐朽スルハ則其部ヲ切斷スルヨリ
他術ナシ縱穿開術ヲ処ストム也膏ニ効
無クノミナラヌ及ニ至ル為ナリ

○第六章血腫部
第一章總論

凡テ此症ハ血ノ留聚ノ発起スル処ノ腫瘍ヲ指テ云

此症ヲ分別スレハ五種アリ

一 血斑

二 真動脈瘤

三 不真動脈瘤

四 静脈瘤

五 肉静脈様腫等ナリ

第二三章 血斑

此症ハ蜂窠状ノ組織中ニ血ノ溢溜スルヨリ
発起スル腫瘍ヲ云○此徴ハ腫形平常ニ
メ色^青銀様ノ色ヲ帯テ格別ニ痛辛者○此
平常ノ因ハ即既ニ患タル挫傷ヨリハ又時
トメハ少ク外因モ無リ起発スルナリ
此治療ニ緊成者即チ

一 刺絡

二 疏滲劑

三 分解スル葦葦即酢水燒酒ノ三味ヲ

混合メ「カ」アルモニヤツシク加テモ宜或又不
加氏佳ナリ

若シ益溜ノ血甚ク夥多メ特解蒸葉
ニメ功無クハ刀ヲ以テ乱刺シ決導ヲセズ
ハアラヌ

第三章直^{スラキス}動脈瘤

此症ハ動脈管ノ廣濶ニナリタル部分ニ血
ノ聚充メ起発スル処ノ腫ヲ指テ云○此徴ハ
築動アル腫物ニメ初小漸大ニメ。終雞卵大

ニナリノ痛ナク皮色変セズメ指ニテ推中ハ
凹陷ニナル者也○此近因ハ動脈衣膜ノ一
部分衰弱シタルヨリ起発スル者ナリ○
此遠因ハ疵創挫傷或動脈衣膜ノナク
ナリタル起発スル者也○此平常ノ発所ハ
刺絡ヲナシ誤タル後ニ肘中ニ発起シ或
大動脈ノ^{子解}ニ起発スルナリ○其年一ヲ
径タル動脈瘤ハ凡テ甚大メ築動ナク
或全ナク而指ニ押ハ陷凹セズ且其近傍

ヲ絡ル神経ノ壓迫緊糸又ルカ故甚痛
アリ○若シ此腫自然ト破裂シ或又術
拙メ穿開スルハ連ニ皮ニ至ル程ニ出血
○此治療ハ押壓傳帶ヲ以テシ或手術
ヲ以テ閉止スル甚大成ラサル動脈瘤ハ
只押壓メ治ルヲ得ナリ其押壓スル
為ニハ

一 上程大ナル枕木綿ヲ幾回モ重テ
押壓スル

三ケイニ
トリスニ
キト
ヲ以スル

二 「モイ」ニホリ止ノ切屑ヲ以スル
四 「テイ」ニ君ノ咬出傳帶ヲ以テスル
此施シタル巻木綿ニ法嚮スル処ノ精氣
或平常ノ酢或テイニ君ノ金創水ヲ
施シレ侵漬メ置キシ而是ヲ必患ルカ
○此症ニ於テ何押壓術ヲ施シ漸次ニ
緊急ニ而皮一ニ年モ續テ施シ○其
押壓スルノ能サル処ノ動脈瘤或押壓
術ヲ施メ効ナキ処ノ動脈瘤ハ手術ヲ

以テ治セヌニハ有ヌ

第四章 不真動脈瘤

此症ハ脂肪膜内ノ蜂窠状ノ纖維中ニ
動脈ノ血ノ溢聚スル者也○此症ノ微ハ廣
大ナル不平ノ腫ニメ暫時ノ間甚太クナリ
鉛色ヲ帯ヒ軟弱ナリニメ而指ヲ以テ推ハ
消滅セヌ或又モ動ナク或又動アルニ甚々
微ナル也○近因ハ一個ノ動脈衣膜ノ挫
傷或被裂或腐蝕セラルルヨリ起発

○若共大者ニメ
壓術ヲ及テ

スル者ナリ○凡テ此者真ノ者ヨリハ甚
危シ何者呼吸壅塞シテ発ニ易シ且ツ
押壓スルニモカクノ間ニ出血メ連ニ
ニ至テアリ

此ハ治療ニ於テ其小キ腫ハ直ニ動脈瘤ノ
如クニ押壓術ヲ以テス全治スルヲ得ザル
ハ唯手術ヲ施スヨリ他法無キ也
○若彼ノ真ノ動脈瘤ノ破裂ノ血カ
脂膜内ニ溢入スルハ此症ヲ起発スルニ

然ル片ハ直ニ手術ヲ処スニハ非ヌ

第五章 靜脈瘤

此症ハ靜脈管ノ逆理ニメ廣闊ナル者
ナリ○此症ハ多ハ孕婦ノ脛ニ於テ起發ス
ヲ見之○此平常ノ因ハ靜脈幹ヲ挫推
スルヨリ起發スル之即妊娠或肝藏^ハ頑硬
或脈管ニ轉側ニ木節腫ア^ル等ノ者
カ之ヲ挫推スルナリ

治療ニ緊要成ル者

一 挫出タル傳帶術ヲ施シ或其部ニ
草犬小ヲ衣セ押壓セシ

二 其挫推スル原因ヲ除去セシ

其破裂レタル靜脈瘤ハ時トメハ甚危殆
成出血ヲ起發スルナリ然レ此症ハ一
ケニスラ^ハ止テ^テ得ナリ

○又「コロガヘ」ニテ。アードルスパットト名ル一個
ノ屬美アリ此症ハ肘中ニ有液動脈ノ
創ヨリ起發スル者ニメ其動脈ニ有創口

ハ未タ愈着セスメ而其血カ只外部ノミ愈
タシ静脈管内ニ自ラ溢流スル者ニ其
徴ハ肝中ニ有廣キ長圓ノ腫ラメ築動
アル静脈瘤ナリ此症ハ真動脈瘤ノ如
クニ押壓術ヲ以テ或治スルコト有者ニ

第六百廿一「スベエニアート」腫

此症ハ直腸ノ内面或外側ニアル「スベエ」
静脈カ囊状ニ廣カリ「コイプ」様ニ廣ク
ル者也○此症ヲ其所在ニ因テ分別ス

スレハ外発者ト内発ノ者トノ兩症アリト
其外発ノ者ハ肛門ノ外側ノ一部分ニ起発
スル者ニメ其徴ハ肛門ノ外圍ニ血ヲ盈ス
ル痛ミ青色成核腫様ノ腫也○其内発
者ハ直腸ノ内面ニ起発スル者ニメ其徴ハ
直腸ノ内ニ指ヲ入レ探ルル中ハチチ痛ム
腫ヲ覺エ或大便ニ通スルニ當テ内部ニ
及出スル者也

此治療ニ緊要成者ハ「スベエ」静脈ニ聚

云ルスル血ヲ散流セシメ而散流スルヲ能ハ
ル中ハ外出セシムベシ

一 刺絡

二 緩和スル瀉腸劑

三 緩和成 疏條劑

四 分解メ緩和スル糊劑

五 氷ノ如ク寒シ冷ナル水ヲ以ヌベシ

六 「コフチヤ或城及硫黃花ヲ以テヌベシ

其ハ血ヲ外出セシムルニハ

一 清冷ノ「タニア」バツトヲ以テシ此ハ腫瘍
ヲメ能ク速ニ破潰シムル者ナリ

二 水蛭ヲ用

三 廣闊成 靜脈ヲカニテ穿潰スベシ

若此腫ニ下血アル中ハ此腫カ全ク減ルモノ

ナリ「〇内外ノ「スベエ」靜脈ヨリ出血スル

中ハ此ヲ「ヨペニス」スベエニ靜脈ト名ケ又此靜

脈ヨリ出血ナクメ只張タル中ハ「プリ」ニトス

ペエニ靜脈腫ト名ク「〇」時トメハ此出血ヲ

タニアバツト節
至露候ニ

死^ルメ患者快ク覺甚益ア^ルハ。必ス此
出血ヲ遏止スル^ル勿レ^ル如^クムパツトヲ以
テ催進メ出入ス^ル。○然^レモ若^ク出血甚
烈^クメ患者ノ氣力衰弱スル^ルハ即^チ此ヲ
閉止ス^ル。○外部ノ「スベエ」^ニ静脈瘤ノ出
血ヲ閉止スル^ルハ「エーケ」^ニスウ^ルム^ル或^チ「テーデ」^ニ
君ノ金瘡水最良劑トス。○内部ノ「スベエ」^ニ
静脈瘤ノ出血ヲ閉止スル^ルハ「テーデ」^ニ
金瘡水ヲ挿條ニ浸シ挿置キ或^チ「エーケ」^ニ

カ
ハット

スウ^ルム^ルヲ敷貼シ或^チ寒水ヲ置腸中ニ射
入ス^ル。○時トメハ此^ニ「スベエ」^ニ静脈腫ニ直
腸ノ痙攣或^チ直腸ノ膿潰或^チ出血或^チ膿
様ノ粘液漏出ス^ル等ヲ兼テ患^ルハ其
傍^ニ症ニ隨テ方法ヲ処ス^ル。○又直腸ノ
腺力衰弱スル^ルニ因テ起^ルル^ル膿様ノ粘
液出^ル者アリ^テ直腸ノ潰瘍ト診シ
誤^ルハ^ル様ニス^ル。○即^チ此^ニ症ハ清浄ニシテ
強壯ニス^ル劑ヲ以テ^テ鏡射ス^ル。○其^ノ方

蕃薇蜜ト丹岩水トヲ合タル者ナリ
○時トシテハ之等ノ諸腫カ痔漏或
又イブ柿ノウラツト等ニ変後ス

卷之四終

外科新書卷五

遠西 雅骨弗斯不冷吉 撰著
西肥 永保吉雄權之助 訳述

○腫瘍篇

第十一土様腫部

第一章總論

凡此症ハ腫内ニ土様アールトアシヤハノ分子ノ者ヲ畜藏

スル者ニ此腫ヲ分別スレハ三種アリ

其一土腫

其二「イリクトクボイル」
痛ハ

其三「舌石等ナリ」
舌石等ナリ

第二章早土腫

此症ハ腫内ニ白灰或白炭様ノ物ヲ蓄
積スル者ナリ此腫ノ微ハ石状ニ堅ク
ノ皮色変ナル者也然レモ甚堅定シ
難キ者ニ此腫ノ近因ハ土様ノ膠粘ノ分子

或「イリクト」ノ分子カ一部ニ蓄積スル
者ナリ○此治療ハ

一腐蝕灰けヲ施メ消散令メ或精酢
ニ水ヲ多混交シ柔和ニ塗擦シ消散
スル

二カニテ乱刺メ而其陷凹ノ処ヲ洗テ
清潔スル

第三章早「イリクト」カ「ボイル」
痛

此症一箇ノ土様ノ丸腫ニシテ「イリクト」様ノ

分子カ人ニ於テ指趾節ニ癸起スル者ナリ此
腫ノ近因ハ土様ノ性質アル「イグト」様ノ
分子ノ留聚タル者也此腫ノ徴ハ堅クメコッ
ク此様ノ皮色変サル腫ニシテ破潰スルハ
腫内ヨリ石様或石灰様ナル物ヲ出ス者
ナリ。此症ノ治療ニ緊要ナル者

- 一 腐蝕スル灰けヲ以テ消散スベシ
 - 二 カニテ切開テ腫内ノ物ヲ除去スベシ
- 其腫内ニ土様ノ物ヲ含み蓄セスメ手足ニ

癸スル痛風様腫ハ痛アル間ニ乾タル分
解ノ貽業ヲ施用スベシ若し此ニ返流劑ヲ
施スハ殊ニ宜キアリトス

第四言早古石

此症ハ上下ニ在テ腫内ニ石様ノ物ヲ含
蓄スル者也。一名「ステーニホルス」腫トモ云
「ワルトン」君ノ唾管ニハ多ク石様ノ分子ヲ
蓄藏スレト「ステー」君ノ唾管ニハ右ノ石
様アルヲ少シ此「ステー」君ノ唾管腫ハ

舌下ニ生メ頰ノ内面ニ在者也間食物ヲ
嚙下スルニ甚ク防障スル石様ノ腫有片ハ此
症ナル者ト知ル也
此治法ハ腫物ヲ切リ上テ石様ノ者ヲ
除去ル也

第十二空腫部篇

第一三章總論

凡此症ハ蜂窠状ノ組織中或体中一個

ノ凹陷ナル処ニ空氣ノ聚會ノ起発スル者ニ
此腫ヲ分別スレハ五種アリ

其一 空腫

其二 常風~~水~~腫

其三 頭風~~水~~腫

其四 空丸腫

其五 鼓脹~~等~~ナリ

第二章早空腫

此症ハ^{ハツ}脂膜^ニ蜂窠状ノ組織中ニ空氣ノ

聚會シテヨリ起発スル者ニ此近因ハ疔
創或潰瘍ノ内ニ外空ノ襲入スル者ト諸
液ノ中ニ混シ有空氣ヲ其混スル物ヨリ
離隔セウレテ一部分ニ聚盈シタル者ヨリ
起発スル者ナリ此腫ノ微ハ皮色変セヌ
痛ナク彈カアル腫ニメ指ニテ試ニ鼓スル
井ハ口及筆ニテ述ヘカウナル聲音ヲ發者
ナリ此腫ハ外空ニ關係スル者ト内空ニ
離隔聚盈スル者トニ細別メ治療スベシ

此治法ノ其外空ノ者ニ於テハ

- 一 其余リ狭キ疵創及潰瘍ハカニテ筆ヲ用ス
ベシ
 - 二 糸ニテ撫指麻手擦メ腫内ニ間畜スル
氣ヲ外へ發出スベシ
 - 三 其腫ノ近傍ニ於テカヲ穿入シ其口
ヨリノ空エ氣ヲ遂ベシ
- 其内空ノ者ニ於テハ
- 一 カヲ深ク穿入スル

二内外ヨリノ腐ヲ防制ヲ共ニシ就中樟
腦菘ヲ内外ヨリノ共ニ最良方ナリ

第三言早總身風腫

此症ハ空気が脂膜中ニ籠入メ總身脹腫
スル者ナリ此腫ノ因ハ既ニ患タル空腫
或肺癥損傷ヲ帯ル肋骨損傷或氣
管損傷或甚狹窄ナル頸及胸ノ損傷
或脂膜中ニ空気が籠入スル等ヨリ起
発シ或亦一個ノ毒ヲ既服セシ者ハ亦

蒸氣ヲ閉塞シタル者ナリ能ク發起スル
ナリノ高意住テ此二因ヲ考ヘシ總テ外
因關係スル処ノ總身風腫ハ同ク自然下
消散スルコト有リ或亦時トメ身体ノ
肥豊セントスル前徴ニ發起スルコト有之
○此治法ニ於テハ

一總身ヲ指ニテ摩擦スルコト或スヘセ

●山椒或肉豆蔻ノ様ニメ精氣多キ液ニテ洗
濯スヘシ

二 空氣ノ出ル処ヲ得ノ部処ニ切瘻ヲ為
メシ

第四章 頭風腫

此症ハ脂肪膜中ニ空氣ヲ閉塞スル全頭ノ
腫ナリ此腫ハ都テ頭ノ小創ヨリ續キ
起メ別テ大創ニ強キカスカシ膏ヲ貼附ス
ル中膏ヲ凹テ施ス件ハ此患ヲ發起スル
者ナリ

此治療法ハ空腫ノ治法ニ異ラズ

頸

第五章 空丸腫

此症ハ頭ノ前ノ中央ノ処ニ空氣ヲ蓄藏
シテ自ラ鳴ル腫ナリ此腫也最近因ハ氣
管ニ有破裂或膿腫也其氣管ノ破裂ハ即
甚笑或甚叫或甚樂器ヲ吹キ或重物
ヲ提シ或難産等ニテ息ヲ強クスルヨリ
シテ起発スル者ナリ又氣管ノ軟骨ノ
崩潰スルヨリ起発スル者モ親クは驗セリ
其氣管ノ膿潰ハ凡テ瘡壞中ニ於テ起

癸ル者ヲ看得シタリ。此治療ニ於テ其
氣管破裂シタル者ハ自然ニ任セ置メシ但
其腫ハ甚歛劑ニテ療スメシ就中樟腦
燒耐ニ明灸ヲ加タル者或又頭草ヲ酒
ニテ煮タル者ニ明灸ヲ投化シ貼附スル
ヲ最良トス若シ此腫ノ初癸ニ治療ヲ怠
ルハ直ハ咽喉損傷ニ變スル者ナリ

第六十章 鼓脹

此ニ疰ハ空氣丸腹内ニ盈滿臍ノ膨脹スル也。此

腫ノ微ハ腹膜ニ小ク彈カ有テ液波ナク
試ニ撲キ片惟音ヲナス者ナリ。此疰ニ於
テ凡氣ノ位置スル処ハ即。一腸ノ空隙
ニ腸膜カ互ニ附着スル蜂巢状ノ組織
中。三腹ノ空隙此ハ腸ノ創及潰瘍ヨ
リ空氣籠入メ起癸スル也此ニヨリテ
肺管ノ麻痺腸管ノ創或腸間ノ潰瘍
及胆ノ創等此腫ノ平常ノ因トスルナリ
此治法ニ於テ其腸管ノ麻痺ハ平常麻

痺ニ施ス処ノ劑ヲ共テ治ヌレシ就中可ル
ニカシ花ヲ最良トス腸管ノ創及潰瘍ヨ
リ起発スル者ハ多不治ノ症ナリ胆ノ創
ヨリ起発スル者ハ必死証ナリ或腹ノ
貫穿スル術ヲ秘答スレモ此症ニ就テハ
功ナキ也

第十三章 唾腫部

第一章 總論

凡此症ハ唾管ノ一部分ニ唾液留止メ流
通スルヲ得サルヨリ起発ル之此ノ種
屬ハ唾涎腫而已

第二章 唾涎腫

此症唾涎留聚メ^{ウルトニ}_{カニ}ノ唾管中カ
廣闊シタル者ナリ此腫ノ徵ハ^ハ柔和ニシテ
痛マズ^ハ固クメ皮色変セズ液皮シテ此形青
蟻ノ腹状ニ似タル者ニメ破潰スル中ハ雞子
白ノ如キ者流出スルナリ此腫ノ近因ハ舌

下ノ毛腺ニ流輸口ノ閉塞スル者ナリ此
治療ハ其腫ヲ刀ニテ開割シ而巳ニ死個
シタル唾管ノ一部分ヲ切去ベシ此其唾ヲ
輸出スル管口ヲ愈着閉合セサラシメニカ
為ナリ

第十四膽腫部

第一章總論

凡テ此腫ハ胆囊ニ胆汁ノ留止スルヨリ起

発スル者也此腫ノ種々膽囊腫ノミ

第二章膽囊腫

此症ハ其ハ部分ニ有輸膽管ノ閉塞シテ胆
汁ノ留止スルヨリ起発ル者ナリ此腫ノ
近因ハ濃厚ニナリタル胆汁或胆囊ノ石
カ輸胆管ニ閉塞スル者ナリ此腫ノ徴ハ
假肋骨下邊ニ甚深在シテ捻別痛ナク液
波スル処ノ腫ナリ此治療ニ方ハ
一分解剖ヲ与ヘシ即緩和糊劑或緩和

ノ膏ヲ以テスベシ内服ニハ物ヲ烱解スル
石鱗様ノ藥ヲ其ベシ

二其腫ヲ穿潰スベシ此術ハ只胆藏力
腹膜ニ固テ着シタル者ノミ施スベシ其
固着セシ徵ハ已前胆藏ニ炊痛アリ
或其近傍ノ腹膜炊痛有テ後ニ発ス
者此腫ハ常ニ多ク瘻ト變移スル者ニ

第十五尿腫部

第一章總論

凡此症ハ小便ノ膀胱中ニ滯留滯止メ起発
スル腫ナリ此種ハ膀胱腫ナリ

第二章膀胱腫

此症ハ凡テ小便ノ流出スルヲ能ク膀胱
ノ膨脹スル者也此腫ノ近因ハ膀胱頸
及尿道ノ閉塞ナリ其遠因ハ膀胱頸ノ炊
痛或肉疣或狹窄或石林膏胱頸牽縮

麻痺或妊婦ニ於テ尿道ヲ遏迫セラシ
等之此腫ノ後ハ横骨上ニ當テ甚ク沈在
スル雞卵状ノ腫ニシテ絶ヘス漸次ニ増益
シ已ニ大ニ成テ甚痛ニ有リ小便流出
スルコトヲ障碍セラル者也其尿閉ニ由テ
若シ膀胱破裂シレ或又除去ルコト能サル
者ハ遂ニ死ニ至ル

一尿閉ヲ起ス因ヲ除去コトハ即膀胱頸
ノ引縮スルニハ緩和ノ蒸劑灌腸及阿片

ヲ内服セシムベシ

二膀胱ノ麻痺スルニハアルニカシ花ノ色浸
ヲ用ベシ

三膀胱頸ノ焮痛スルニハ刺絡灌腸清
涼ノ疏條劑ヲ用ベシ

四尿管ノ肉疣及狭窄ノ者ニハ絶ヘシ造
膿サスル挿蠟或廣闊ニスル挿蠟ヲ用ベシ

五膀胱頸ニ石淋者ハ尿管ノ類ニテ
膀胱中へ突通スベシ尿道或膀胱ノ石ハ

治法
一 尿管ノ原因ヲ
妊娠ス

手術ヲ施スベシ

六 妊婦ノ尿道過迫セララル、物ハ胎児ノ

頭ヲ上へ押上メシ

二 尿管ヲ以テ尿管ヲ通決スベシ

三 膀胱ヲ穿テ尿管ヲ流世セシムベシ此ハ

尿管ヲ用ルテ能サル者ニ施ス

第十六乳け腫部

第一三章乳け腫總論

凡テ此症ハ乳けノ聚積メ起発スル者ナリ
此腫ヲ分刺スレハ乳房乳け腫ト四肢乳け
腫トノ兩症ノ者也

第二章早乳け腫

此症ハ甚大ナル腫ヲメ痛者ニ此腫ノ因ハ
乳け過多ニ分内セラレ。或吞吸スルテ至
テ微小ナルヨリ起発スル者也此腫ノ
徴ハ平大ニシテ痛ミ柔軟ナル腫ニシテ
焮痛ヲ帯サル者ナリ。若シ此乳けヲ速

三レカラレ根生法

ニ吸出し若ハ消散セサル中ハ此腫或炊痛し
或膿潰し或頑硬スル者ナリ

此治療ニ緊要ナル者

一 其為盈満セル乳けヲ口或吸毒管ニテ
吸出スル

二 其吸出しタル後直ニ柔和ナル疏條劑
ヲ使ハシ

四 唯^骨ノ木綿ヲ置或烱解スル蒸葉或消
散スル蒸葉ヲ施ス

五 柔和ナル押壓綿ヲ以テ注意テ乳房ヲ
押壓スル

諸筋筋様者及返流劑ハ此腫ニ於テ害ナ
リトスルナリ

第三言四支乳け腫

此症ハ乳けノ位置ヲ失テ其一部分ノ脂
膜中ニ賭溜シテヨリ起発スル者也此腫
ノ因ニハ乳けノ過多ナル者或乳房ニ
送輸スル管中ニ障碍スル者或四支ニ送

流スル者等也○其下肢乳け腫ノ乳處け
腫ノ微ハ初癸ニ一方ノ腹股合縫ノ處ニ著
キ腫モ無ク赤色ニシテ痛ミ其翌日其痛
ミ股内及膝節ニ延蔓シテ而メ其合縫ノ
處腫起シ其後痛ミ脛及跗ニ至者ナリ○其
上肢^④乳け腫ノ微ハ初癸ニ必ス腋下疼痛
シテ後前腕節或指本節至ル迄蔓延シ
其腫ハ疼痛止ラサル間ハ^⑤濕ル^⑥ト無ナリ
此乳け腫ノ症ハ其色赤黄ニシテ先伏ヲ

帶彈カアリテ指ヲ以テ試ミ推斥陷落セ
ガル者ナリ○此腫ヨリ^⑦繼キ起ル諸症ハ
甚患者ヲメ苦困セシムル者也即甚々
焯解スルノ難クシテ或遂ニ乳け様ノ
膿潰ニ變移スル者也此治療ニ於テ其
腫ヲ焯解スルニ緊要ナル者ハ
一 灰け或乳けニテ煮タル石^⑧鹼ノ莖葉或樟
腦精ヲ施メシ
二 消化ニ易キ淡薄ノ食物ヲ與メシ就中

可ケルフルソストフ及蜀葵葉ト芥トノ色侵
ヲ最良トスルナリ

三 疏滯劑及利尿劑ヲ内腹セシムベシ

四 樟腦ニアルカニキム テニプリアテニムヲ多加

混メ多ク施用スベシ

第十七 不真破裂

第一章 總論

凡テ此症ハ臍或陰囊ニ發起ノ内藏ニハ発

昌齋辨此ニ不真
破裂下条ノ体器
腫脹垂或ハ破裂
等皆ナリナラシメ
症ナリ内科撰要
則テ破潰ト譯ス
是ナリ蓋シテ此
内腸向
膜腹膜等其維持
約ヲ失ヒ其本位
ヲ脱シテ出突腫脹
ス故ニ其病ノ所在
ニ由テ諸般ノ危
篤ノ症ヲ發起ス
此ニ論スル所ハ
其腫ノ儲蓄スル
所ノモノニ從テ
各其名ヲ里ハ
ニスルモノナリ

カハ腫ニメ其内ニ一個ノ液ノ聚積スル者ニ
此腫ノ発所ニ因テ分利スレハ陰囊ニ有ル
者ト臍ニ有ル者ト兩症ナリ又其腫内ニ
令口畜スル液ノ種々ノ性質ニ隨テ細別スベ
シ其陰囊ニ有者ヲ細別スレハ九種アリ

其一 水破裂

其二 血破裂

其三 風破裂

其四 精破裂

其五 肉破裂

其六 膿破裂

其七 脂肪破裂

其八 静脈破裂

其九 水液破裂等ナリ

二其脘ニアル者ヲ細別スレハ七種アリ

其一 水破裂

其二 血ノ破裂

其三 風破裂

其四 膿破裂

其五 肉破裂

其六 静脈破裂

其七 脂肪破裂等ナリ

第二章 陰囊水破裂

此症ハ陰囊中ニ水聚ム會シテ腫脹ヲ發ス
ル者ナリ此腫ヲ又細別スレハ三種アリ

其一 皮水破裂此ハ陰囊脂膜中ニ聚起スル
者ナリ

其二陰囊水破裂 此ハ陰囊ノ内ノ空隙ニ聚積スル者ナリ

其三 莢衣膜ノ水破裂此ハ畢丸或輸精管ノ莢衣膜ニ發起スル者也此腫ニ單複ノ症自然ニ發起スル者。傍症ノ者血症有也此腫ノ近因ハ上ニ記セル部分ニ蒸氣ノ如クナリテ輸リ来ル後カ過多ニ分利セラレ或吸上ラル、コヲ妨碍セラウル、等ニ此腫ノ微ハ痛マス後皮アリテ重ク柔軟ニメ

色衰セシム或トキトシテ透明ナルコト有者也其一個々ニ微ヲ細別スレハ各異ナルナリ其皮水破裂ノ微ハ指ニテ推ニ暫ク陥落シ而シテ陰囊モ陰莖モ前皮^{カリスダニテ}モ共ハ一ニ腫起シ其腫時トメハ異形ニ蟠曲メラル者ナリハ其陰囊破裂ノ微ハ其腫ノ周圍カ至テ細密ニ丸クメ陰莖或前皮ノ腫ル、コハ稀ナリ其莢衣膜ノ破裂ノ微ハ其畢丸ニ在ルハ其腫雞卵状ニシテ而探テ試ニ畢丸ノ

無ヨウナル者ナリノ其筋精管ニ在クハ其
腫長田ニシテ而探リ試ニ四等丸ヲ直ニ得
ラル、者ナリノ

此治療ニ緊要ナル者

- 一 分解スルテ此法ハ即長腫ノ章ニ載如ク
- 二 強壯ニシテ焬解スル莖葉即頭草ニ明若
樟腦ト合セ蒲桃屑ニテ煮ル者ヲ以テス
- ニ「ヲキレメルコロキシイ」ニ「アルニカ」ニ花
色ナシクテ侵
ヲ兼用メ内服セシム

二 合口蓋スル水ヲ決道スルテ此術ハ分解スル
ヲ能ガルニ處スベシ其方

一 穴牙潰スルテ此術ハ全ク治得テ少し唯急
苦ヲ除去ノ術ナリ

二 其腫ノ全形ヲ堅ニ開割スルテ此法ヲ
以テ常ニ根治スルヲ得ルト虫疔甚キ
ニ旁症ヲ発起スル也

三 腐蝕石ヲレツケルキ一程ノ陰囊ノ前
ト下トノ部ニ貼附メ莖衣膜ニ至迄腐蝕

し穿通スレシ而其疵口ニ造膿劑ヲ附貼し
テ傳帶ヲ全愈スル迄施用スレシ其愈ス
レハ三四十日ヲ経ル者也且此法ヲ施シト
虽レ旁症ヲ發ルコト免ルコトナシ其旁症
ハコレルツ腰陰囊諸腸ノ歎痛或莢衣膜
ノ歎痛或頑固ナル等ナリ然レ此諸旁症ハ
格別危クナク刺絡緩和劑灌腸ヲ施
片ハ容易ク治スルコトヲ得
四「ホフ」上君ノ法ノ如キ其腫上ニ串線ヲ膿

術ヲ施スレシ此術最良シ法ニシテ全ク根治
セシムル者ナリ而レ已ニ説ケル旁症モ必發
スルコト無クナリ

第三章 陰囊血破裂

此症ハ陰囊一部分ニ血ノ溢盛シテ起スルモ
ノナリ此血ハ溢流スル部分種アルカ如クニ
又血破裂ヲ細別スレシ即陰囊ニ外皮血
破裂陰囊空隙中血破裂。畢丸或輸精
管ノ莢衣膜ノ血破裂。畢丸實體ノ血破裂

ノ四症也此腫ノ微ハ色赤腫痛青痛ニシテ痛ニ透
明ナラザル腫ニメ畢丸或陰囊ニ在テ都
テ外因ヨリ起発スル者ナリ其近因ハ陰
囊及畢丸ノ一部ニ血ノ溢入スル者ナリ
其遠因ハ挫傷或損傷或衰弱或陰囊
辺ノ脉管ノ弛緩ノ廣闊ナル者也
此治療緊要ナル者ハ

一之解スル就中刺絡清涼ノ疏條劑
及清涼ニメ稀釈ニスル諸劑及焯解スル
蒸葉最良ナリトス
二其溢入スル血ヲ刀ニテ穿入メ決通スル
也

第四章陰囊風破裂

此症ハ陰囊ノ脂膜中ニ空氣閉塞自然
ニ通ルヨリ膨脹メ発起スル者ナリ其自
然ヨリ發スル風破裂ハ如何メ発ルカ
知レ難シ也其旁症ノ者ハ總身風腫ニ
於テ間ニ見ル有又陰囊創ニ於テ起

癸スルノモ有此腫ノ微甚微之ヲ知テ難
キ程液波有者ナリ

此治療ニ於テハ

一 分解スル

二 刀ニテ穿刺メ凡氣ヲ駆出スベシ

第五韋早陰囊精破裂

此症ハ精液ガ畢丸管中ニ聚積メ其部
ノ巨大ニナル者ナリ

此腫ノ微ハ畢丸及副畢丸ノ格別硬カ

ラサル腫ニメ觸抵スレハ甚々疼痛ヲ癸シ
腰迄牽引拘急スル者ナリ 此腫ハ多ク自
然ニ消失スル者ナリ然レ時トメハ焮痛ヲ
癸シ或甚々硬頑ニ變移スル者也都テ此
症ハ房莖ニ方テ精ノ射出スル片ニ其管
中ニ障礙スル物有テ快通セザルヨリ起
癸スルナリ

此治療ニ要ナル者ハ

一 「ステレニク」^{及精管}食スベシ

二 清涼ノ疏條劑ヲ使フ

三 刺絡ス

四 水様ノ飲劑ニ硝石ヲ加ヘ飲服ス

五 陰囊ヲ引上置ク

第六章 陰囊肉破裂

此症ハ畢丸或ハ副畢丸ノ堅硬ニ腫ルハ者ナリ此畢丸ノ肉様ノ質ニ変スルヲ今ニ至ル迄逐ニ見テナシ此腫ヲ分別スルハ二症アリ一ハ善症ノ者此痛

ナキナリ○其二ハ惡症ノ者此甚痛有也此腫ノ微ハ都テ堅ク平場ル畢丸ノ腫也然レ間々又不平ノ者モアリ或又副畢丸ノ如ク如此腫アル一有此ハ初発ニ於テハ容易ク觸底メ知ル也此腫時トメハ水破裂或靜脈破裂ヲ旁兼スル一有ナリ其惡症者ハ鮮血腫變移シ易キ者也此治療ニ其善症者於テハ分鮮劑ヲ以テ治スル一得之然レ必流スルニ非其惡症ノ者

ハカニクハ此様ノ者ニ変終セザルニ先テ畢
丸ヲ除去シ緊要ニ然レ若シ輸精管カ
腹筋輪ノ内ニ至近硬腫スルハ此手術
ヲ施スル勿シ

第七章 陰囊膿破裂

此症陰囊或畢丸ノ中膿ヲ聚蓄シタル
者ナリ此腫ノ近因既ニ患タル炊痛或膿
聚留スル者ナリ此腫ノ徴ハ諸他ノ膿
瘍ノ徴ト異ナシ其畢丸ノ膿破裂

或其畢丸ノ全ク消滅セラレテ有或甚
持重スル瘻ヲ起シ其瘻口ヨリ畢丸ノ組
織ノ腐タル者流出スルテ有也此ニ由テ陰
囊ノ破裂裂ハ畢丸ノ膿破裂ヨリ危_クナ
キナリ此治療ハ開割シ膿ヲ決道スル
一大手段ナリ

第八章 陰囊脂肪破裂

此症ハ陰囊ノ蜂巣状ノ組織中ノ腫ニメ
其部ニテ脂肪カ甚タ過多ニ含利セラレ

ヨリ) 發起スル者ナリ) 此腫ノ徴候ハ高方證
治法皆脂脂腫ト異ナリナシ

第九章陰囊靜脈破裂

此症ハ陰囊脈或輸精管ノ脈ノ廣闊
ナル者ナリ) 此腫ヲ分別スレハ二症アリ)
其一陰囊脈破裂此ハ陰囊ノ上面ニ纏絡
スル諸管ノ腫脹ノヲルヲ以テ知メシ
其二輸精管ノ破裂此ハ其輸精管カ厚ク
ナリテ腸ノ如ク蟠曲轉回スルヲ以テ知

ルメシ) 此腫ノ因ハ諸管ノ彈力衰へ或其部
ヲ運行スル血ヲ障碍スル者ナル等ナリ)
此治法ハ内外ヨリ) 強壯ニメテ解スル劑
ヲ施用スメシ

第十章陰囊水泡破裂

此症ハ陰囊ノ空隙ノ中或輸精管或畢
丸ノ莖衣膜空隙中ニ細小ノ水泡ノ聚會
メラル者ナリ) 此水泡ノ或鳩卵及鷄卵
ノ大ナル者ナリ) 而只ハツ有者モ有或

三四或五六余モ有リ也此腫ノ微ハ卵形ノ
腫ニメ其腫多ハ輸精管ノ正中或上方ニ
在テ痛ナク運轉シ彈力有テ液波ナク
且ツ畢丸及輸精管其餘都テ探索スル
ハ知也○此腫大人ヨリハ小兒ニ多シ時トメ
二個発シ其初発ハ分離シ有テ終ニハ
連着メ一個ニナル者有ナリ此腫間ニ
治療ヲ施及シテ虫死自然ト消散劑其
米或ハ解劑ヲ以テモ消散スルヲ得ナリ

就中小兒ニ於テ最モ消散シ易キ者也
若シ此劑應セザルハ小穴ヲ穿テ貫メ
而漏漚シ柔和ナル造膿劑ヲ以テ膿
潰會同スベシ

第十一章膿水様破裂膿ハ作臍

此症ハ空腫水臍留メ臍ノ腫起スル者此症ハ
透明ニメ痛ミナク液波有テ而間姪婦
及水腫様ノ人ニ於テ発シ
此治療ハ和柔ナル押壓術及強壯ニスル

貼其ニテ治又し腹水ニ於テハ其腫自然
ニ破潰メ而メ治療スル者之

此章不
解

第十三章臍血破裂

此症ハ臍ノ内ニ血ヲ含聚メヨリノ腫起スル者
ナリノ此平常ノ因ハ肺ノ挫傷或臍帶ノ
破裂或臍帶ヲ餘リ速ニ脱落シタル者
ナリ○此腫徴ハ青赤色ノ腫ニメ後波ノ
係テヲル者之

此治療ハ諸他ノ血腫ノ治法ト無異ハ

第十四章臍風破裂

此症ハ臍部ニ限テ発ル空腫ナリノ此腫ハ總身
ノ凡腫或臍ノ創及潰瘍ノ内ニ外氣ノ入テ
起発スル者ナリノ此腫ノ徴ハ平常ノ空
腫ト異ナルナシ此治療ハ按摩し或
精氣ノ衰キ多量劑或穿刺メ治メシ

第十五章臍膿破裂

此症ハ臍ノ膿熟シタル者ヲ云也此腫ハ
凡テ先ニ患タル臍炊痛或臍ニ膿ノ貯

留したる者或蛇虫胆石等ヨリノ癰スル者
ナリ此腫ノ微ハ上章ニ説ク膿腫ノ諸
徴ニ異テナキ也○此治療ハ刀ニテ穿刺ノ
膿ヲ決導スルヨリ他療法ナシ

第十五章臍肉破裂

此症ハ臍ニ海綿状ノ肉ノ萌出スル者ヲ云
ナリ此症ヲ分別スレハ二症アリ
其一ハ善症ノ者此ハ色赤メ痛ナキ者ナリ
其二ハ惡症ノ者此ハ鉛色ニメ痛ミ有ル者

也○此腫ノ肉凡テ臍帶破裂或膿潰シタ
ルヨリ起者ナリ此治療ハ其善症ノ者
ニ於テハ乾燥セシメ或結切リ或消化セシ
メ或切斷シテ而乾燥劑ヲ以テ治ベシ其惡
症ノ者ニハ蟹螯腫ノ如ク始終保護法用置
ベシ

第十六章臍靜脈破裂

此症ハ臍ノ脈管或臍ノ周圍小靜脈管
ノ破裂シタル者ナリ此腫ノ因ハ脈管ノ

弾力衰弱シタルヨリ発起シ而時トメハ甚
キ惡症ニ変ル^レ有ナリ○此治療ハ強壯
劑或押壓術或弛瀉タル尿管ヲ能ク注
意シテ切用キ治スベシ

第十七章 臍脂肪破裂

此症ハ臍内ニ若シ脂肪カ自然通ルヨリ
多ク聚會スル中ハ発起スル者ナリ此腫ノ
原因^{ヲルキ}徴候治療ハ少モ脂肪腫ト異^ナリナシ

第十八章 體器腫部

第一章 總論

凡^レ此症ハ内藏或他ノ器ノ自然ノ位置ヲ
失テヨリ^テ発起スル腫ナリ此症種屬ハ諸
真^ニ破裂裂龜背諸不具脱臼骨損傷妊
婦ノ子宮等ノ如者也然レモ此諸症ハ
各部ニ選述スレハ惟此部ニ於テノ腹
股合縫^ニ章九腫ノミヲ載述スルナリ

第二章 腹股合縫^ニ章九腫

此疰ハ一方或両方ノ腹股合縫ニ一個或兩
個ノ畢丸ノ来リテ腫ル者ナリ此腫ノ
平常ノ因ハ自然ノ寒働或陰囊中ニ畢
丸ノ漸ト垂低スル者或疾病ニテ合縫
内ニ畢丸ノ拘勤スル者等ヨリ起発者ニ
○其合縫内ニ拘勤スル者ハ石淋尿閉勞
碌^カ熱病或拘^カ辛^テ病等ノ人ニ於テ此ヲ見
テアリ其自然ノ拳動ト陰囊中ニ垂低
スル者トノ兩症ハ小兒ニ於テ見テ多シ

此腫ノ徵ハ陰囊中ニ畢丸一個或兩個ナ
ク痛マヌ動スヘクメ堅色変セサル腫ヲ合
縫ノ処ニ発シ試此ヲ押抵スレハ痛ノミ
ナラヌ氣絶ヲ発也此腫ヲ合縫破裂ト
看誤ラサルニ意ヲ注メシ毎度小兒ニ
於テ診定示シ誤ル^ル有ナリ此治療ハ
緩和ノ點ヲ処メ予和ニス^ル此症年
長シ或勞^ル或房事^ニ等ニテ畢丸ヲ陰
囊中ニ垂鎮スル^ル有^ル之若シ此症ヲ誤

治スル中ハ炊痛膿潰ス頑固死痺等
症ヲ起スル也而此脱垂ハ毎々真ノ
腹股合縫破裂ヲ續発ス者ナリ若シ
此等ノ諸症ヲ発ル中ハ常ニ此ノ誤治
ニ由ルト知メシ人或三ノ畢丸ヲ
如此中ハ第三ノ畢丸常ニ腹股合縫
内ニ位置スル者ナリ此症ニ於テハ医女
ル者モ注意メ察診スメシ如何トナ
西畢丸陰囊中ニ具スルニ由テ容易ク

破裂表ト誤リ認レハナリ若シ堅硬ニメ
凡テ輝解スルナキ腫ヲ合縫ニ発ルニ
アル中ハ即第三ノ畢丸タルヲ知メ
キナリ

外科新書卷六

遠西

雅骨弗斯不冷吉

撰著

西肥

永保吉雄權之助

譯述

脫垂篇第一

第一章總論

脱垂ハ或内藏カ自然ノ位置ヲ変更ス
ルヲ云フ○是ヲ則脱垂ト破裂トニ區別

以名ク其顕然タル者ヲ脱垂ト名ク其
隱伏ノ者ヲ破裂ト名メキ也

常ニ多ク脱垂し易キ者ハ一直腸二
腔 三子宮ナリ

第二章 直腸脱垂

直腸ノ内部ノ膜カ肛門外ニ脱垂スル是
ヲ直腸脱垂ト名ク

此標ト的ハ肛門ニ癸ル赤色ノ腫脹ニ
指ヲ以テ肛門内ニ収納スルヲ得メシ

直腸内膜ト肛門ノ閉合筋トノ衰弱ハ
此患ノ近キ起原ナリト注意メシ

治療ハ即

一 故ニ復ルル是術ハ直腸ノ翻出し
部ヲ諸多ノ要用ナル方ニテ肛門
ニ収納スメシ

二 既ニ収納シタルヲ堅定スル術ハ一適
宜ノ押木綿及Tノ字形ノ縛帶。二小腸
脱 三ハスサリム

三衰弱セル部分ヲ強壯ニスルヲ即
其方「トルメシユ」根ノ煎け玫瑰。柘
榴皮。檫木皮。礬石。及ヒ丹。礬ヲ赤葡萄
酒ニテ煎タルけヲ以テ灌射スベシ。及ヒ
患処ヲ灸スベシ

第二章 臍脫垂

是臍ノ内膜カ陰門唇外ニ脫垂スル者
ナリ。〇是ハ指ヲ以テ收納スヘキ処ニメ
赤クメ多少ノ縮籠セル腫脹ニメ知ル

ヲヲ得ル

〇此近因ハ臍ノ内膜及此部ノ閉合筋ノ
衰弱アリ

此治療ハ

直腸脫垂ノ治法ト異ヲナシ即チ

- 一 收納スルヲ前症ニ同シ
- 二 已ニ收納シタル部ヲ鑿定スルヲ即其
一 綿撒糸ノ紐糸及Tノ字形ノ傳帶其
二 「ヒスサリ」ニ其三環輪

三衰弱シタル部ヲ強壯ニスル即強壯收斂ノ劑ヲ參茸薑朮及ヒ權射劑トシ使
用スル

第三章子宮脱垂

是ハ子宮カ腔ノ内或腔外ニ脱垂スル者ナリ○是ヲ區別スレハ即

- 一 全脱垂スル者 是ハ子宮カ腔外ニ脱垂スル者ヲ云
- 二 未全脱垂之症 是ハ腔内ニ脱垂スル者

ヲ云○此症ハ指テ以テ探莖メ知テ得ル○全キ者ハ前端ニ横孔ノアル楕圓ノ体ヲ長テ子宮ナリ事知ル即此標的ヲ以テ肉痔ト區別スルヲ得ル是近因ハ子宮紐帶ノ衰弱或鉋骨余リ廣闊ナル故ナリ

此治療方ハ

一 收納即其術ハ患者ヲメ仰臥セシメ指ヲ以テ徐々押定スル

二既ニ収納シタル后ニ其部ヲ極鎮安
定スルニハ

一環ヲ莖内ニ挿スルヲ

二一箇ノ「ベサリユム」

三少時日暮す臥セシムメシ

三衰弱シタル細帶ヲ強壯ニシスベシ即
其ハニカハ強壯スル莖葉浴湯及熱皮ヲ
内服セシムメシ

妊身中ハ少時日子宮ノ脱垂ヲ防止スル者

ナリ

子宮ノ脱垂ハ脱垂ノ一箇ノ種ニメ凡テ
出產スルニ方テ胞衣ヲ急ラ不用メ隔離
スルヨリ將來ス〇此症ハ子宮内面カ陰門唇
ノ外ニ是レ出ル者ナリ

論治是ノ治療ハ

一心ヲ用テ徐々ニ指頭ヲ以テ収納スベシ

二二三七日モ麻蓐ヲ就カレメ環或「ベサリユム」
ヲ用テ極鎮安定スベシ

三 衰弱スル部分ヲ強壯ニスベシ即内外ヨリ強壯劑ヲ処スベシ

破裂裂第二

第一章 總論

破裂トハ一箇ノ腫瘍ヲ或隱伏セル内藏力自然ノ位置ヲ失忘スルヨリ起ル者ナリ
○破裂裂ヲ発スル处在ニ隨テ各々因ヲ下

セハ即是ヲ十二等ニ區別ス

- 一 小腹合縫破裂
- 二 陰囊破裂
- 三 股破裂
- 四 卵圓形孔ノ破裂
- 五 股破裂
- 六 脛破裂
- 七 脛破裂
- 八 腹破裂

九 腰破裂裂

十 會陰破裂裂

十一 胸破裂裂

十二 頭破裂裂

此十二等ニ亦大小區別アリ此區別ハ則今世^ニ痲^ツヲ受ル内藏ノ性ニ隱テ區別スレハ

一 破裂セル内藏ノ許多ノ性所具

二 破裂ノ各箇ノ形状ナリ

第一ニ属スル者區別スレハ即

一 腸破裂裂

二 個膜破裂裂

三 腸及個膜破裂裂

四 胃破裂裂

五 肝破裂裂

六 脾破裂裂

七 子宮破裂裂

八 膀胱破裂裂

九 肺破裂裂

十 腦破裂裂

第一ニ属スル物ヲ區別スレハ即

一 單症

二 複症

三 輾

四 燬傷

五 死瘁

六 膿潰

七 入し納ム可カラザル者。或固着シタル者
八 ア、ン、ゲ、ボ、ル、子稟物 九 怪久シタル者
十 破裂裂シタル者

是近因ハ其患処ノ衰弱ニメ其近傍ノ部
ヲ通りテ脱垂シ或近傍部ト共ニ脱垂スル
也

此遠因ニ属スル者ハ以前患タル挫傷金
創膿潰腹膜ノ一切傷、稟受衰弱、哭泣
スル中ニ方テ劇キ吸息、吹笛、出産、大便

ノ通利、其他如此物ナリ

單症 破裂標的ハ漸次ニ起テ内ニ収納
スヘキ腫脹シテ身体ヲ伸テ仰卧スル中ハ
其腫瘍消滅シ吸氣ヲ含ム中ハ甚大ク
ナルナリ

複症 破裂ハ合併ノ標的ヲ以テ知テ
得メシ〇破裂裂種、ノ症候ニ付テハ預
メ輕症危症死症可危症不可危症ト云ヘシ
論治單症治療ハ

一 収納
 二 已ニ収納シタル部ヲ
 堅定スル
 三 衰弱シタル部ヲ強
 壯ニスル
 〇 収納術ヲ処セント欲セハ患者
 ヲ先ツ仰臥セシメ膝ヲ曲シテ医意ヲ
 用テ徐々ニキヲ以テ脱垂ノ部ヲ内ニ
 収入スル
 〇 故ニ復セルヲ堅定スルニハ
 適宜ノ破裂傳帶ヲ用メシ
 〇 衰弱ヲ
 強壯ニスルニハ燒酒浸炭石等ノ如キ
 方劑ヲ以テスル

第二章 腹股合縫破裂

腹股合縫破裂ハ内藏カ腹筋ノ輪環ヲ
 連リテ外部ニ脱出スル者ナリ
 〇 此患ノ
 標的ハ疼痛ナク鉛色ナラヌ且ツ収納ス
 べき處ノ漸次ニ腫起スル腫張ナリ
 此腫
 屬ハ
 一 腸破裂 是ハ収納スル片ニ當テ一ノ音
 ラナス彈カアル腫張ナリ
 二 網膜破裂 是ハ収納スル片ニ當テ一ノ音

ナク硬クメ収納し難キ腫張ナリ

三 腸及腸袢破裂是ハ前二章ノ合併ナリ是症ヲ以テ知ヘキ也

四 膀胱疝是ノ一箇ノ標的ハ小便難若是ヲ収納スルハ尿閉スル者ナリ

此ノ破裂ノ傍疝ノ形象ハ下條ノ種類ニ區別スル

第一 胃症破裂是ハ一方腹股合縫ニ発ス

第二 複症破裂是ハ両方腹股合縫ニ発ス

破裂帯ニ二枕ヲ架メ保持セスニ非ス

第三 輾症是ハ収納し難ク或全ク収納スメカラス且ツ危重ナル傍症マリ即嘔吐腹痛甚シキ便秘歎吃逆及其他如此症ヲ發ス

輾症ニ關係スル者ハ

一 大便閉

二 腸内ニ空氣ノ躰留

三 内藏脱垂

四 腕垂ノ炊痛

輾破裂ノ治方

一 常々患者ヲメ膝ヲ屈シテ仰臥セシム

ニ 数次ノ刺絡

三 「メイニグビルニク

胆^{オシイフ}ハ油或肉煎けヲ施シ而後「エグソニイニシ

ス」塩或烟中塩ヲ施スベシ

四 微温ナル腰傷

五 油ヲ混和シタル葦葉或「ヲキニカラト」止

或「ゴーラルト」水。寒水。雪氷。或其他如此物等

之

六 緩下劑或「サルエヒソニイニシス」ノ水ニテ

焯解シ内服スベシ

七 薔薇香水三十二莪「ラウダニユムリキユイヒユム」

二十箇「リキヲルアノテイニユス」ミ子ヲレリス

ホフマニ「一莪ヲ混シ六「ミニユ」テニ」毎ニ

一匙ツ、タメシ

八 故ニ復スルニ必ス注意用テ收納スルヲ

試^レし〇凡^〇破裂^九切斷即減スルヨリハ猶傍
症カ增長メ收納スル^一ヲ能^ルナルハ此術
ヲ処ス^レシ

第四 焮痛アル破裂是ハ疼痛焦熱及焮
等有ル赤キ腫ニテ知ル^レシ〇此ノ患^心於テ
ハ諸ノ辛^干辣ナル催腸劑及烟草ノ烟催腸
共ニ甚^也害アリ

此患ヲ切斷スル^一ハ此ノ症ニ於テ他ノ症
ヨリハ甚^ク要^ス用ナリ

第五 死痺アル破裂若シ此症ニ於テ死痺
未^ク減スニハ須^ク手術ヲ施ス^レシ何ナレハ
腸細或腸ノ死痺セル部分ヲ除キ去ニカ為
或腸ノ兩端ヲ附着セニカ為ナリノ内部ニ
ハ須^ク熱皮^カカニ^プル^ヲ飲服セシム^レシ

第六 膿潰セル破裂是ハ屢々腸細ニ生^ル間
々腸ニ生スル者ニテ遂ニ治ス^レキ処ノ瘻^瘻瘻
カ續キ残ル者ナリ

第七 收納ス^レカ^ラナル破裂是ハ收納ス^レキ

瘻^瘻瘻

カラヌトハ虽氏輒ル^レ無ナリ。○医須ク
常ニ輒^レ有^ル處ノ傍症ヲ見ス。微鏡ニテ
診定スベシ。

收納スベカラサル破裂ニ關係スル者ハ即

一 疝囊ニ腸或腸脬ノ附着スル物

二 腹垂部互ノ癒着是ハ疝囊ニ關係セ
スメ裂衣ケ出ル處ノ部分腹筋輪ノ廣サ
相比例セサル塊ニ互ニ附着スル者

三 一箇ノ腫張有テ腸脬ノ堅剛ナル物

四 互ニ癒着スル^レナク裂衣ケ出タル部ノ過
大ナル者

五 燥結屎カ腸内破裂ノ處ニ血積シタ
ル者

論治 第一第二ノ症ハ破裂ヲ切斷スル
ヨリ他術ナシトス。然レモ此症毎々疝帶ニ
凹リタル枕ヲ附タル者ヲ以テ燒眉ノ
急ヲ防^ルシ若シ迫リタル傍症ナキハ
必^ズ等閑ニ手術ヲ施ス^ル勿^レ

第三第四ノ症ハ常ニ直収ノ下利劑ヲ以テ収納スルヲ得メシ○第五ノ者ハ唯「ナルエブリ」塩ヲ水ニテ烱解シ屢用ルノミニテ治ヲ得メシ

第八稟賦疝是ハ小兒ニ在ル者ニメ裂ケ出ル処ノ腸其筐内ニ在テ畢丸ノ如ク（位置ヲ隔テ在ル処）一箇ノ疝囊ニメ離ル、フナキ物ナリ

此ノ患ハ胎子ニ於テ腹膜ノ竅ヨリ發

起メ腹筋輪ヲ通りテ畢丸カ腹筋輪ニ衝入速ニ十分ニ閉テ能ク唯産後ニ於テ竅カ残り居ル者ナリ此ニ因テ稟受疝ノ標的ハ産後旧ナラヌノ症候見ル者ニメ畢丸ノ陰伏スル者ナリ

第九怪久疝是ハ輒ルテ稀ニメ収納シ易シ然レモ適宜ニ製セル疝帶ヲ以テセザル中ハ内ニ保有安定スルヲ甚難シトス

第十破裂シタル疝是ハ疑ニトム魚疝腹膜

ノ破裂スルヲ稀ニメ以テ前アリシ病因ノカ
ヲ以テ知ルメシ疝ノ連ニ顯シ物且ワ大ナル
物及連ニ輒ハ痛疼シ熾痛スルヲ常ヨリ
ハ猶著ク有ヲ以テ知メシ

第七章 囊疝

論 疝 疝出タル内藏カ腹筋輪ヲ通テ
陰囊中ニ脱垂ス是ヲ囊疝ト名ク○此
患ノ標的ハ腹筋輪ニ至ル迄モ蔓延シテ
陰囊腫脹スル物ニメ腹内ニ収納スルヲ

得メシ

○此疝ノ種類ハ小腹合縫疝ノ種差也然レ
或水或肉疝ノ添テマリ○此疝ハ腹股合
縫疝ヲ保治セザルニ因テ癸スル者ナリ○
腹筋輪ハ囊疝中ニ於テ漸治ニ蔓延ス
ルノ疝囊ト同シ

○此収納術ハ腹股合縫疝ノ収納術ト同カ
ヲ用メシ而是ヲ処スル后再ヒ脱垂セザラシ
メニカ爲ニ適宜ニ造リタル疝傳帶ヲ施ス

又し

總テ收納ス又カラサル処ノ徑久シタル囊
疝ハ陰囊ヲ「ヘスユルトパン」ヲ以テ保宜ス
又シ〇時トメ只疝形ノ巨大ナルニ因テ收納
可ラサル者アリ此症ニ臨テ常ニ由休
テ仰臥セシメ苛烈ノ物ヲ禁シ及スユルト
帶^{バネ}ヲ帶シタル中ハ自ラ内ニ納定スル者也
〇又數度ノ刺絡及疏滌劑大ニ効アリ
若し輒タル囊疝ニ軟ル腹股合縫疝ト

同キ傍症アラハ須ク治療モ亦同方ヲ施
ス又シ〇若し婦人ニ於テ腹股合縫ノ疝カ
陰門唇マテ低垂スル中ハ此ヲ陰萎疝ト
名ク

第八章 股疝

若し腹ヨリマ少内藏カ「フハルロツヒヤ」ニ
筋根^筋紐^筋帶ノ下部ヲ通りテ外部ニ行中
ハ即チ是ヲ股疝ト名ク〇屢ニ産タル婦人
ニ於テ此ヲ患ニ注意ス又し妊ニ因テ發スル

此ノ患ハ鷄卵ヨリ大ナルヲ稀ニメ腹股合縫ノ直下股ノ上或下ニ発ル者ナリ

此患害ヲ発ル物ハ即腸痲腸膀胱ナリ

此症ノ種類傍症及ヒ治療腹股合縫疝ト同シ

第九三早卵形竅疝

大較若シ無名骨卵形竅ヲ通リテ或内藏外ニ脱垂スル片ハ則此症ヲ発起ス是ヲ卵形竅疝ト名ク

此穴竅ノ上縁ハ脱垂セル内藏ノ常処ニメ逐ニハカム筋根ト三頭様ノ股筋根ノ第一頭ノ間ニ所在スル者ナリ

此症ハ初発ニ於テハ甚小ニメ暫ニメ探リ得メシ其后日月ヲ積ムニ隨テ大ク卵形ト成ル此ヲ痲痿ノ説スレハ男_子殊ニ稀ニメ婦人ニ於テハ常ニ多シ

腸痲腸膀胱或此シ等ノ部分一同ニ卵形穴竅内ニ閉テ居ル者モ間亦有ナリ

是治療ハ初癸ニ收納シテ次ニ適宜ノ疝
帯ヲ帯シムメシ

第十一章臃疝

是ハ腹部内藏ガ臃骨突出ル端ニ從テ
腕垂スル也○腸及腸袢或両症共ニ此ノ
部ニ變位スルヲモアリ
收納スルニキ處ノ此ノ腫瘍カ肛門傍側ニ有
部ヲ自由ニ大リテ甚長クナル者ハ此症ノ
標的トス

治法收納スルニハ適宜ノ疝帯コレキバニトヲ用テ一ノ
良法トス

第十一章早陰莖疝

陰莖ノ縁カ難産或其他一二ノ因ニテ甚
衰弱スル中ハ其部ニ於テ莖縁カ腸腸袢
膀胱ノ押壓ニ避ク偏リテ莖疝ト名ル
處ノ疝ヲ癸ス○此第一ノ標的ハ子宮莖
ノ收納スルニキ腫ナリ

是ノ治療ハ輪環或ベサトリヲ用テ要用上

第十二章 臍疝

臍内或臍直下ニアル疝ヲ臍疝ト名ク小兒^{キニテ}及婦人ニ於テ此患アルヲ多ク歴視セリ○腸腸^{エニ}腸^ニ腸^ト或肝脾胃膽^ニ之様至及肝ノ^ハ回^ル帶^ト処ノ症ヲ發スルノ物ナリ○脱垂セル内藏ヲ収納スルニハ治療ノ最要ナル視的アリ○必先^ク是ノ術ヲ施メ后須ク適宜作タル臍^ノ紐^ト帶ヲ帶ハシムメシ○此種類ノ輒ル疝ハ腹股合縫疝ノ篇已ニ記載スル処ノ方劑ニテエテ

奏ガル者ハ只此ニ於テ手術ニマラヌニハ治ル^ルニ無ナリ

第十三章 臍疝

是以前腹ノ或ル部分ニ少ク自然ノ穴數ヲ具ヘタル症ニメ是ヲ臍疝ト名ク因ハ前ニ患タル疝創或潰瘍后ニ腹ノ各部ニ疝ヲ發スル者也○然レ人若シ甚々努カメ腹ヲ張ル^ハ凡テ腹筋ノ筋根様廣闊ナル内白線内ノ半月様ノ廣闊内及腹筋

輪ノ環上ニ発スル者ナリ此症ニ於テ腸胃
腸胃肝膀胱及妊婦ノ子宮ヲ看得セリ
○間此ノ如キ疝ニテ全腹膨脹スルヲ看タ
リ○砌裂アル押シ木綿及傳帶ハ其ノ
疝形ノ大小ニ作ル即腹疝諸症ニ於テ
ハ第一術トス

第十四章 早腰疝

或内藏カ腰腔ニ脱垂スル者ヲ腰疝ト名ク
○此患ニ於テハ腎藏カ八骶骨内ニ抵垂

スル者ヨリ他物ニマラヌ○此症ハ疼痛有
テ腫張シ押壓スル中ハ則消滅シ然ル中ハ小
便頻数ヲ續カス

是ノ治療初発ニ收納シ而后砌裂アル押木
綿及適宜ノ傳綿ヲ施スベシ

第十五章 會陰疝

會陰腫張ヲ成者ハ多ハ膀胱或一二ノ内
藏ナリ○妊婦ニ於テハ子宮ノ押壓ニ因
テ膀胱ノ押壓セラル者ナリ然レモ予一

男子ニ於テ此患有ヲ歴視セシナリ○收納
スルキ腫脹ニメ漸次ニ增長スル會陰ノ
下ニ發スル者ヲ収納スレハ尿利スニハ是則
此類ニ微ナリ○此種類ノ破裂カ若シ姓
婦ニ發ルハ産后自ラ愈ル者ナリ○若シ
愈ヘカラサルハ須ク適宜ノ帶ヲ以テ極
鎮安定スル

第十六章 胸疝

是ハ胸肋ノ間ニ發スル腫ニメ或肺ノ一部

或心藏ノ動脈瘤多ク發起スル者ナリ
肺破裂ノ徵候ハ手ヲ以テ押スニ柔ニメ疼
痛セサル者ナリ○心ノ動脈瘤ハ腫脹ノ
徵ハ搖動アル腫ヲ試指ニテ押入片ハ甚々
呼吸息迫ヲ發起スル者也

治法 肺ノ破裂ハ柔ニ指ニテ押壓スルハ
ハ收縮スルニ而適宜ノ帶ニテ全愈ル
ヲ得○心動脈瘤ノ腫脹ハ之ニ及メ不
治ニメ外部ヨリノ押壓スルヲ勝ヘ忍ブ

不能者ナリ

第十七章 頭破裂

腦ノ或ル部分ニ生メ腦蓋ノ周圍ニ癸スル
ヲ頭破裂及腦破裂ト名クルナリ其因
腦蓋骨ノ成長ヲ障碍スル者ハ常ニ
此患ノ近因ナリ○此患ノ常ニ癸所ハ
頭ノ西側及顛後頂ナリ

此標的ハ丸ノ痛マヌ鉛色ナル腫脹ニ
メ押納スル片ハ消滅シ試ミニ探テ索スルハ
骨縁ニテ極壞スルカ如シ○或頭腦破裂
ハ炊痛添フナリ有リ或破裂ハ死痺腦水
張等ヲ添テ有者ナリ○是ハ一箇ノ見
徴有テ漸次ニ死ニ至ル者ナリ○後頭ノ
腦破裂ハ單症ト云レ常ニ危キ傍症ヲ
癸ス

此治療ハ燒酒ニ浸セル砌辟邪アル如ク大ナル
押木綿ヲ以テ常ニ持重メ予ホニ安定ス
又シ○腦ノ復症破裂ハ如何ノ症有ルニ

帝ニ危殆ナルノミナラヌ特ニ死メキ者ナリ

外科新書卷六終

外科新書卷七

遠西 雅骨弗斯不冷吉 撰著
西肥 永保吉雄權之助 譯述

骨病篇

第一章關節腫總論

諸關節ニ腫起脹ヲ受テ有就中膝蓋ニ多
シ故ニ此各箇ノ種ヲ次條ニ於テ論説セ

し

第二章 關節焮痛

此症ハ關節靱帶ノ焮痛ヲメ或寒氣或
金創或打撲或挫傷及脱臼或シニキケン
様毒或其他辛辣毒ノ積留メ発起ス
此始ノ五症ハ外因ニ属シ后ノ二症ハ内因
ニ属スル者ナリ○此徵候ハ痛疼独赤
色ク以テ認得スメシ○其初ノ内ノ種々
分鮮スル水莖ヲ施シ其后ノ内因ノ症ハ

乾燥セシムル分解散莖ヲ以テ治スメシ

第三章 關節膿腫

此症ハ以前關節靱帶ニ焮痛有テ而後
発起シ或關節ノ空隙ニ膿け積留メ発
起スル者ナリ○此症ノ徵候ハ諸他ノ膿
腫ノ徵ト異トナシ
治療ハ切込テ集溜セル膿けヲ務テ流
スメシ

第四章 關節ノアルテリチケ腫

此症ハ「アルテリケー」様ノ辛辣毒カ猪溜
メ發起ス○此症ニ於テハ疼痛甚烈ク腫レ
少ク顯レ皮色変ナク○此等ノ久ク續ク
者ニメ屈伸スルヲ不能向又炊痛或膿
潰ト變スル者ナリ○此症ニ於テハ流出
スル質腐骨症ナレト虽凡黒色ナリ

治法ハ須ク内服ニ生アチクモニ^生及鉄草
ノ色浸及発汗劑ヲ与メシ○外用ニハ^生口ハ
ニスバルサ^生塗ルメシ。此バルサ^生無^生ハ発泡膏

ヲ傳テ暫ク夜ヲ世スメシ此症ハ温泉最モ
功有ナリ

第五章關節ホダガリセ腫一名アトモヒ

此ホダガリセヨリ起ル關節腫ハ已前劇キ
痛有テ漸次ト上部ニ外ル者ナリ此劇キ
疼痛ハ別メ春秋トニ先テ此レ大指ニ者者
也此腫ハ二三七日モ續ク者也

治法外用ハ寒浴及摩擦ヲ施ヲ称言セリ
内服ニハ竜胆根ニ^生アリキ^生ルヒツトリヲ^生リ

ヲ加へ共ハフ○此「ポータキリ也」症ノ年月ヲ
径タル者ハ「カルクコノツプル」石灰腫及關節強直ヲ
發ス○若し「カルクコノツプル」破裂スル中ハ白
灰様ノ物ニ稀淡ニメ無臭ナル液ヲ流出
スルナリ○外用ニ腐蝕石ヲ附貼スル中ハ
消散スル者ナリ

第六章關節腫脹

アニゲリヤ病ヨリ
起原スル腫ナリ

此症ハ「アニゲリヤ」病ヨリ起發スル關節腫也
○治方ハ「アニゲリヤ」病篇ニ於テ詳説ス

第七章關節豆腫

此症モ亦腫瘍篇ニ於テ詳明ス

第八章關節「ユグト」腫

此症ハ其關節ノ周圍カ腫起シ而疼痛ナ
ク指ヲ以テ壓シ中ハ暫ク陷段メ指痕ヲ残ス
者ナリ○此腫ノ所在ハ脂肪膜ニメ韌帶ニ
ハ不關係者也○此症ノ發起ハユタクハ膝關
節或前趾ノ指骨本ニ有者也○治方他部
ニ發ル「ユグト」腫ト同シ

第九卷關節白腫

此症ハ其色白ク痛ナル者ニメ括囊靱帶ノ外面ニ在ル辛辣粘液ヨリ起者也

○此疼痛ハ間口口ツプヒユレセニノ性アリ間亦雞子白ノ如キアリ○此腫ハ常ニ堅硬ニメ液鳴スルナク又頭指ヲ以テ押壓スルト虫氏指痕ヲ留ナシ是ニ由テ關節水腫及口ユグ止腫ト分別スル○其關節豕肉腫ハ余症比皆同シト虫氏尺其大サノミ

異ナリ○此腫ハ消解シ難メ多ハ關節靱帶ニ潰瘍ヲ発メ遂ニハ不治ノ腐骨疽ヲ発シ而メ死ニ至者也然レ靱帶及骨ノ未腐肉蝕セサルノ間ニ大ナル芫青膏ヲ貼ル中ハ治メシ此膏ヲ貼シ暫ク膿液ノ出シ葉ヲ施中ハ愈ス○此症過度ニ劇ク成タル者ハ其部分ヲ切斷スルヨリ他術ナシ

第十卷關節腐骨

此症ハ總テ已前アリシ焮痛或挫傷或潰

瘍或骨碎片或「ウキイニドトル」に或關節
白腫ヨリ起発ス○此ニ傍来スル腫瘍ハ經
久ニメ大ク且疼痛シ赤色黄色独或部分
ニ於テ液鳴スル者ナリ○此腫ヲ弄損シ
置片ハ後數日ノ潰瘍トナリ而持長独ヲ
發ル者ナリ

治法ハ須ク腐骨ヲ切出シ或甚部分ヲ
切断スルシ虽然唯關節ノ部分ヲ切リ
上片ハ却テ命ヲ損スル者也

第十一章 關節豚肉腫

此症ハ關節ヲ絡包セル肉ノ豚肉状ニナリテ
骨モ亦腐肉敗スル也○此症ニ於テハ關節
ノ周圍カ豚肉腫ノ如ク堅硬ニ成而メ漸
次ニ甚又增長シ其上面ニ數條ノ青長キ
班線突起ス此班線ハ血管ノ押メ此如クナ
ル者也○此症遠キ原因ハ關節ノ全創
ニメ其靱帶ノ破裂ナリ○此即先ツ初メ
骨ヲ養食學スル液カ脂肪膜内ニ貯留シ

其后腐骨疽ト成ル

治法ハ其部ヲ切斷スルヨリ他術ナシ
○腫瘍ヲ開破スルニハ須ク小力或腐蝕
劑ヲ以テスルヲ勿シ何者二三値内ニ入ニ
至ルヲ

第十三章關節水腫

此症ハ水腫病篇ニ説明セシ

第十四章關節骨様腫

此症ハ微細ノ骨碎カ或軟骨力次女ニ関

節ノ空隙内ニ入ルヨリ起発スル者ナリ○

時トメハ疼痛及腫脹ノ傍発スルヲアリ又

時トメハ此等ノ傍症無者ナリ○凡ソ此症

骨ノ分子或軟骨ノ引離スルヨリ発ス

治法須ク切斷メ其骨ノ分子或軟骨ヲ

除去セシ

第十五章骨損傷總論

骨損傷トハ骨部ノ錯綜カ三三箇ニ折離ス
ルヲ云ナリ

一 単症是ハ只骨ノ一部ノ損傷セル者
二 複症是即三三箇ニ損傷シ或雙骨一
同ニ損傷スル者ナリ

三 合併症骨損傷ニ金創傷来ル或焮痛
脱臼^{ライトリンゼニ}其他如斯症ノ傍来スル者ナリ

○此損傷カ種々ノ形状ハ次條ノ五種ニ区
別スル

一 横損傷ノ者是ハ骨ノ實體ヲ横ニ通
貫シ損傷スル者ナリ然レ此症ハ誠実

ナリト思ヨリ少キトス

二 斜損傷ノ者是ハ常ニ多トス

三 打碎スル者是ハ骨カ諸多ノ小片ニ損
傷スル者ナリ

四 長形ノ者是ハ損傷ナシニ骨髄維ノ
破裂スル者ナリ

五 重畳セル者是ハ損傷セル者ノ兩端互
ニ重ナリタル者ナリ

○骨損傷ノ近キ因ハ外ヨリノ逆理ニ成シ

或骨ノ脆軟ニナリタルヨリノ發起ス○此徵
候ハ

一ニ關節ヲ除キ其他ノ部ノ一二処ヲ逆
理ニ運動シ

二ニ運動スルニ當テ声音ヲ聽キ

三ニ其損傷セル部分ニ於テ畸ナル見

四ニ骨ノ自然ノ強サト外ヨリ抵觸セル
者ノカトヲ比較スル

五ニ總傷症ト一箇傷症トヲ以テ知メシ

○骨損傷ヲ察視ノ患者ニ諭サニハ或
症ハ輕易ナリ或症ハ重難又或症ハ
甚危ク又或症ハ至ルト云フヲ定示
スメシ○治ヲ施スニ時宜アリ又骨ノ大サト
損傷ノ性質老人患者ノ体ノ制衣造ト
現在傷症ト過去ノ傷症トヲ覽察シ
治ヲ施スメシ○骨損傷ノ治療ニ西女
用ナル者ハ即チ
一 故ニ復スル

二 已ニ復故スルヲ堅定スル

三 傍症ノ諸疾ヲ除去

其故ニ復セシムルノ劑ハ只折タル骨端カ
行送テ翻転シタル者ノミ用之此術ヲ
為ニハ即

一ニ引伸スル

二引縮スル

三故ニ復シ安定スル

此三術ニ施テ須ク各箇ニ注意スルキハ

即患者ト先生ト弟子トノ坐居ノ法ハ先

弟子ハ施術中妨礙ナキ処ニ居テ術ヲ施

スノ間又坐ヲ移ニ及サル処ニ坐スル〇患

者ノ置様ハ其損傷近傍ノ諸筋ノ引

張タル力疲一樣ニ相對セシムルヲ要トス〇

其引張スルカト引縮ルカト互ニ其カラ對セ

シムル假令少異ナキテ不能モ勉テ其

速イノ微ナラニテ要ス此ニ方ノカハ

總テ折タル骨ニ共ニ其直ニ其部ヲ
引クヲ云時トメ

又諸器械ヲ以テ引尿スベシ其器械ノ弱
キ片ハ繩條ヲ加ヘ用○此引展ノ術ハ急
劇ニスルコト勿レ徐ニスルヲ要トス此レ諸
筋ノ斷ルニ延伸セシメニカ為也而后折
タル骨端カ互ニ摩手轉スルコトナク自由ニ
故居ニ入ル程ニ引展スベシ

此伸展方ヲ施メ骨端故処ニ復レタル片ハ
此レヲ緊定セシムニハ備帶及患処ト一身
ノ居置ニ注意スベシ此傳帶ハ先ツ押木

綿ト巻木綿ト控尻トヲ備メシ此等
ハ損傷ノ形象患部ノ形トニ由テ種々
別アリ其宜ニ通スベシ

患者及全体ノ居方ハ患者ノ意ニ通シ
患処ノ骨緊定スルヲ要トス○此症ニ要
ナル器械ハ曰ク「レール」器曰ク枕曰ク「ストロ
ー」アルメニ曰ク「ヘー」ニラアテニ及其他如斯器ナリ
○凡テ折タル骨ヲ故ニ復セシムルニモ又復
故セルヲ緊定スルニモ總テ患処ヲ少曲ケ

置テ良トス

若し患處ノ形象健固ナル方ト共同し様ニ
ナリ疼痛去リ又全ク不去ト過半減少
シ而シテ備傳ヲ施シタル上下ノ部共ニ過
直ノ温氣ニナリ而其備傳ヲ施シタル下
部ニ柔ニメ陷シタル腫アリ而シテ体ノ一部
或患處ノ一部分ヲ押メ痛ナキトハ損傷
カ故ニ復シ備傳モ能施メ其部分モ克
置テ有ト知メシ

其折タル骨ヲ愈着セシムルトハ是只自然
ノ良能ノ所為ナリ即自然ノ良能力骨
ノ微僅ヲ長メ又一日輸送シ来ル骨後
ヲ接セシメテ接續セシムルナリ

諸損傷膏及揮発劑ハ骨損傷ノ治方
ニ不要用トス骨損傷ノ傳帶ハ屢々更
ルト虽凡故ニ復シ難シ何者多ハ傍症
ノ添来スルニ由テ也○然レ他故ナキト
ハ更傳スルト勿レ若傳帶多少實柔

二十リノ若クハ患處劇痛シ若患處ノ上
下腫タル中ハ更傳フスメシ

其ノ尋常傷症ハ即チ炊痛^{オニトスニキニク}疼痛^{スラフオニスハ}及^{コルツカラフテニキニク}獨擗^{アケレハカマ}等ニメ此治法ハ即

一 刺絡

二 下劑

三 食禁示

四 清涼ナル心氣ヲ定靜スル諸劑

五 多解敷葉ナリ

合併骨損傷ハ其傷症ノ又骨箇ノ性質ト
ヨク符スルノ方法ヲ施メシ然レモ單症ノ者
ハ之ト異ナリ

假令ハ骨ノ摧崩ヲ兼ル損傷ハ總テ其
速カニ死ニ輝ヲ起ス此症ハ恒切斷

暫時治フナキ怪久損傷ハ其折タル骨端
ヲ互ニ摩手擦シ且ツ刺戟メ強壯ニスル葉
劑ヲ敷貼シ猶且食禁ヲ慎ヲ要トス
若シ骨損傷ニ内部ノ金創ヲ兼ル中ハ

須クフツク之傳帶ヲ施メシ何者骨ヲ動
揺セスメ日ニ其創口ヲ檢見スルキカ爲也
○若シ損傷カ關節ノ近傍ニ在テ軟帶及筋根
ノ破裂ノ傍片ハ其処ノ宜キニ應メ切斷スルヲ
良トス然レ注意シテ施ス片ハ切斷スル
ニ不及フアリ

凡テ挫傷ハ常ニ骨損傷ヲ兼ル者ナリ
然レ時トシハ傷医心ヲ用ル程ニ損傷甚
シキフアリ○此症ニ於テハ合併帶ハ害アリ

故ニ分鮮セシムル前劑ヲ以テ滋潤セシメ而
フツク之帶ヲ以テ備傳スル
譬ハ刺烙下劑清涼稀薄ニスル劑ヲ須ク
加用スル若シ挫傷ニ屢ハ大ニ躊躇ヲ
成フハ此藥劑ヲ与メシ若シ切無メハ切痕
術ヲ施スル○時トメハ骨損傷ニ出血ヲ
發フアリ此ニ二箇ノ原因アリ
其一ハ骨ヲ折碎スルカ動脈織維ノ接續聚
合セル部ヲ破裂縦裂セシムルニ由リ

其二折傷セル骨端ヨリ發スルアリ
其第一ノ症ハ其動脈ヲ止メシ

其第二症ハ容易ニ治ル不能故ニ骨端
損傷ヲ故ニ復ス又シ是古昔ヨリ血ヲ
止メニカ為ニ種々ノ法ヲ設アル中ニモ
押メ之ヲ止ルハ甚害アリ故ニ收斂劑モ
害アリ若シ動脈ノ深キ處或其患處ノ
上ニ動脈支カ蔓延シアラスメ其創口
ニ此術ヲ施テ不能中ハ切斷スルヨリ他術ナシ

若骨損傷ノハニ血管破裂シタルハ常ニ体
外ニ出血スルナク蜂窠狀ノ纖維中ニ溢
世スル者ナリ是ハ即チ皮表ニ少モ創傷
ナクメ折タル骨端ニテ血管ヲ破リタル者
ナリ或又速ニ腫脹增長シ焮痛ナク首
トメハ服道達^ト而管ノ位置ト骨損傷ノ
有處トヲ比較ノ見中ハ知ル者也此ノ血カ
管外ニ出タル狀ヲ察知スメシ〇此症ニ於
テハ其破裂裂シタル管ヲ詰ヨリ他術ナシ

若し結^ツヲ不得部位ナラハ須ク切斷^ツ術ヲ施ス

骨損傷ニ於テ骨ノ一部ヲ失底ノ減瘦スル^ハ只一骨アル処ノミニ有リ且ツ作用ヲ為^ラ不能程ニ短クスル者ナリ

此治用ヲ失ニ^テ防クハ一箇ノ器械ヲ以テ治療中勉テ骨ヲ延伸ス

凡骨ノ一部分ヲ落去シタル骨損傷ヲ自然ノ能ヲ以テ自然ノ通サニメテ克動揺ス

ル様ニナシタル者多見ナリ

第二章 腦蓋損傷

此症ハ單ト復トニ區別ス悉ク頭金創ノ篇ニ詳説ス

第三章 鼻骨挫傷

此症ハ總テ横ニ折レ易シ豎ニ折ル^ハナリ^ノ凡テ此症ハ鼻ノ陷^リ或金創或腦ノ震盪或鼻孔ノ焮痛等ノ添来ル者ナリ

若し腫脹甚著しキヲ無量是則是ヲ以テ鼻ノ損傷タルヲ知ルベキナリ

此諸骨ノ合併損傷ハ甚危し且是ヨリ鼻潰瘍或鼻痔トナリテ終身畸形トナル○此症ヲ故ニ復セシムルニハ先患者ヲ椅子ニ坐セシメ其面ヲメ明窓ニ向シメ其後正ニ居ル弟子胸ニ患者ノ頭ヲ當テ抱シメ而其額ヲ弟子兩手ヲ以テ緊抱し師ハ患者ノ前ニ立テ能見察ホシ右手ノ

小指或筯或小棒ニ木綿ヲ卷キ鼻孔内損傷アル処コテ入レ此ヲ以テ内陷セル骨ヲ克ク注意シ外部へ排シ出スベシ此間ニ左手ノ食指ト大指トヲ鼻ノ根ニ少ク内ニ押入シ意ヲ用ベシ而其骨ヲ故ニ位置セシムベシ

○傳帶ハ小ナル三角ノ押木綿トスリニゲルバニトトヲ施スベシ

此傍症ノ治療ハ ①刺絡 ②下劑 ③清涼

劑及分鮮多湯ヲ以テスル

第三章 面諸骨損傷

若シ顔面ノ諸骨就中ユクス様ノ穴大起カ損傷スルハ其損傷セル骨カ内部ニ避入シテ諸多久停症ヲ發ス

此治療ハ顔面ニ切痕ヲ入レサレハ治シ難シ然レ此切痕術ハ危キ禁ル其_レ他如此停症無_レハ用ル_レ勿ル_レ也_レ就中ユクス様ノ穴起ノ折タルハ切ラヌ_レ木ヲ一片_レ牙齒ノ間

ニ置キ下顎ヲ強ク押し附ル_レハ全治スル_レ有

第四章 下顎損傷

此症ハ其正中或其側ヨリ損傷スル_レ有
○此症ハ齒カ齧_レ吾スルヲ以テ知_レ又上面凹凸平ナルヲ以テ知_レ又外科指ヲ以テ向ノ_レ方ニ押し當テ動ス_レハ其折骨自_レラ音ヲ_レナスヲ以テ知_レ也

○其折骨カ格別離_レスニ居テ正中ニ在_レ

損傷ハ危クナシ唯之ニ及テ側ニ損傷有
テ其骨端大ニ離レ居リ或下顎ノ骨
管中ニ在ル神経及動脈ノ破裂ヲ兼ル
中ハ間ク搖蕩及動脈瘤ヲ起者也
若し折骨ノ末々離レスメ有ハ唯押
木綿ト頸傳帶トヲ以テ下顎ヲ上顎ニ
緊ル合スル中ハ四七日ノ間ニ全ク治ス
○此等ノ損傷ニ其部ノ齧吾メスリノ途
有テヲ兼中ハヨク注意メ其齧五ロヲ檢

見メ治ラ施スメシ

此症格別大ナラスメ正直ナル下顎損傷ハ
唯患者ヲメ相應ナル高サノ椅子ニ居シ
メ大指ヲ以テ其中ニ及テ高起シタル齒
ノ次位ノ齒ヲ押し其他ノ指ヲ以テ其ハ
透君骨ノ下ノ処ヲ以テ位置ヲ定鎮ス
メシ
若し折骨ノ行途ニ在ハ互兩方ヨリ
引延テ要用也

此術ハ一方ノ食指ト一方ノ食指ト中指トヲ
木綿ヲ以テ巻キ而先其食指ヲ最次端
齧齒ノ冠様起ノ処ニ迫入レ而ノ其突起
ヲ押し又両手ヲ舌下ニ居シ其手ノ大指
ヲ顎顎下ニ附テ置キ直ニ上顎ニ近ク
メシ然レモ格別十分ニ合ヌメカラス是飲物
ヲナサシメニカ為也○此巻木綿ハ先ツ其
正中ヨリ裂タル長キ押木綿ヲ置キ其
上ニ猶厚キ押木綿ヲ以テ之覆ヒ顎備帶

ヲ施スメシ○此三等ノ木綿ハ皆火酒ヲ浸シ
施スメシ○若其舌口ノ骨カ裏面ニ非避有
片ハ其損傷ノ側ニ有ル齒ニ枚ヲ巻木綿
ヲ以テ緊着シ置メシ
若亦齒無片ハ他ノ一物ヲ以テ損傷メ上ノ
上顎ノ間ニ置テ共ニ下顎ヲ緊着シ置
メシ是飲食セニ為ナリ○此症ニ就テ言
語笑吃咬等ヲ禁ヌメシ而若シ他ノ旁症ヲ
生片ハ其症ニ隨テ治ヲ施スメシ

第六章 推骨損傷

此症ハ其ハ実体若ハ其突起ノ処損傷スル
アリ若シ只横又斜ニ在ルカラスト様^{刺芒}
ノ骨ノ損傷ハ推骨損傷ノ如ク危ヲナシ
○若シ脊推ノ損傷ヲ被リテ其出血ノ
為ニ排押セラレ或髓カ甚ク震盪スル中
ハ下部一体ニ不遂シ或一身ノカラニテレ
キニク^{胸直}ヲ発ス○此損傷ヲ蒙ル初ニ
旋テ多ハ便秘閉シ而後ニ至テハ又自

ラ利シ其部分死痺シ或遂ニ斃ルニ至
ル○夫推骨ノ損傷ハ單複ニ係ラヌ探
索シ又旁症ヲ以テモ知ルメシ○若シ脊
髓カ震盪ヲ発ル者ハ五六日ヲ経ル時ハ
治ス○其カラスト様ノ突起し側面ニ逃
避シタム損傷ハ其患者ヲメ俯卧セシメ
指ヲ以テ故ニ安定シ兩側ニ石子キ押し木
綿ヲ置キ緊定備傳ヲ施メシ
此治療中ハ唯服ヲ下ニメ卧シムメシ

此推骨損傷ハ多ハ死ト虽凡亦腦蓋損傷
ト同法ヲ施スル

第七章 肋骨損傷

此症ニ於テハ其骨内ノ方々又外ノ方ニ逃
避ス者也○其内方ニ去ル者ハ肋骨ノ実
体ニ一箇ノ者觸當テ之ヲナス○其外方へ
去者ハ肋骨ノ上ヲ強ク押ヨリ之ヲ致ス
○此ハ深ク索テモ知リ自ラ音鳴スルヲ
以テモ又患處ヲ動サシ見モ知ル○其

胸肋ノ引牽或挫傷ヲ蒙リタル胸痛ヲ
發ルニ由テ則肋骨損傷ヲ診シ得ニ
ヲ要ス

第八章 單胸骨損傷

此症ハ横ニ在者及單症複症ノ者有○其
複症ニハ折骨ノ内ニ押し入テ有者ナリ或
亦縱隔膜中ニ溢流シタル者也○單症ハ
探リニテ知ル

此治療ハ傳帶ヲ施スヨリ他法ヲ用ルニ及ガ

ル者ナリ。○其折骨ノ内ニ押入有リ或血
縦隔膜中ニ溢流ノ豪タル複症ノ者ハテ
レラニテ施メ押凹ニタル骨ヲ引上ルテ要
法ナリ。○此両法ノ者ニハ間々傍症アリ
○此ハ其傍症ニ隨テ法方ヲ施メシ

第九十章 髌骨損傷

此症ハ横ニ在者ナリ。而單複アリ。○其
複症トハ則前症ニ同シ。○複症ヲ療ス
ルニハ右手ノ食指ニ脂肪ヲ塗リ。肛門ニ挿

入テ内ノ方ニ凹タルヲ外ニ押出ス。○其ハ
備傳ハ押し木綿ト下ノ字様傳帶ヲ
要法トス。○

第十一章 無名骨損傷

此症ハカラム骨 ヒウゴ骨 或レウト骨ノ折々
ル中ハ觸テ診シ又鳴声有リ。聞テ知メシ
○此等ノ損傷ハ單症有リ。希ニメ或内藏
ニ毀傷ヲ被フ。或ベツケニ 耻骨ノ内ニ空処ヲ云ニ毀傷フ者也
○是難治ナリトス。縱ヒ治ヲ施スト。全ク故ニ

緊定スルヲ不能故ニ唯自然ニ任スルヨリ他
ナシトス

第十二章 鎖骨損傷

此症ハ鎖骨ノ横タアツテ他ヨリ緊定セラ
ルハ無カ故ニ甚挫傷ニ易トス○此損傷
正中或前後両端ノ内ニ有者也○其右端
ノ損傷ハ前段ノ后口ノ下ノ方ニ行者也
○此症ヲ知徴ハ見聞探索ヲ以テ容易
ク知セシ尚且其又前ニ落下メ揚ルヲ不

能ヲ以テ得セシ○此症ニ於テ胸裂ルハ動
脈瘤ヲ生ル或死ニ至ル者ナリ○此症ヲ
接ルハ甚容易也然レ其接ヲ緊定
シ治ト虽レ故ニ全ク復スルヲ無也又ハ不
具トナル者ナリ○其治法ハ患者ヲメ
低キ机ニ居セシメ先其弟子ハ患者ノ後
ニ居テ両膝ヲ以テ患者ノ脚骨ノ間ニ
當テ患者ノ体ヲ以テ前ニ押し一齊ニ
両手ヲ以テ看前ヲ扱テ后口ニ引ク其

師ハ患者ノ筋ニ之テ其損傷骨ヲ手
指ヲ以テ故所ニ復スベシ○其ハ備傳ハ佳
意メ之ヲ傳スベシ

此治療ニ緊要ナル備傳ハ一鎖骨ノ上
下ノ陷凹所ニ少シ長サノ押シ木綿ヲ緊
納スベシ二長メ厚キ押木綿ヲ其毀傷ノ
上ニ十字形ニ置キ其上厚紙ヲ以テ製
タル三角形ノ控幣ノ置ベシ三多ノ字
形ノ傳帶ヲ施シ常ニ看ヲ以テ右口ノ

方ニ傾向スル様ニ傳スベシ○此ノ備傳ノ
未ニ終テ終ニ十字形ニ取違ヒ置ベシ四毀
傷骨端ヲブラストツク欲ノ製衣タルキウルス
一フ器ヲ以テ下ヨリ支テ置ベシ五支ヲ
法ヲ以テ傳帶スベシ此症小兒ニ於テハ支
ニハ傳帶ヲ施スニ不及ナリ

第十三三早看脚骨損傷

此症ハ其实体ニ有者アリ又其突起ノ処
ニ有マリ○其实体ヲ損傷ハ堅ク或

横ニアリ其隆起ノ損傷ハ上角ニ有者
アリ又鳥嘴則新書ノノ処ニ有者ナリ
又或首ニ有者アリ又肩角ニ有者アリ
○此症ハ皆手親探求メ知メシ○凡ソ堅ノ
者ハ損傷シテモ離レルナシ横ノ者ハ
動スレハ離サル者ナリ○若シ隆起ノ者
損傷スル時ハ深切ニ意注テ故前ニ復
納シ押木綿ヲ施メ緊定スメシ○此胛骨
横ニ損傷メ折裂ノ度齧吾メ定位ヲ失

タル者ハ之ヲ故トニ納復スルニハ其方ノ
腕ヲ以テ引キ上ケ其臂鼻ノ位ニ平等
ニ至迄ニ及ホシ指頭ヲ以テ押し之ヲ故処
ニ納メシ○其傳帶ハ先押木綿ヲ胛骨
ノ形ニ造リ之ヲ置キ其上ニ厚紙ヲ以テ
亦胛骨形ニ製タルヲ置キ長サ四尋ノ
木綿ヲ以テ傳スメシ○其腕ヲ曲テ首
ヨリ懸テ法ノ如ク傳スメシ

第十四章 膊骨損傷

此症ハ上中下ノ三部ニ有リ是上部又正中
及下端ノ近傍ニ有者也○此部中ノ三陵
筋ノ内ニ有ル損傷ハ探索シ難シ其他所
ニ有者ハ探求シ及其鳴声ヲ聞テモ亦
知レシ○其斜ニ有損傷ハ其腕ヲメ縮
短ナラシム者也

此治術ヲ容易成ル術ハ其支ヲ体ト
四十度ノ角ヲ為ス様ニ上テ前腕ヲ以テ
一人ハ是ヲ前ニ引伸シ一人之ヲ後ニ引テ

故処ニ復スベシ此骨ノ正中損傷ニ施ス傳帶
緊索要ナル者ハ長テ正中ヲ裂定シタル押
木綿一條環狀ノ卷木綿二條ホルト紙三
四葉○此ホルト紙ハ其長凡六七寸シテ
其内ノカニ相應心ノ厚子ノ押木綿ヲ同シ
長サニ製シ附而其幅ハ患所ノ四ツリヲ
覆フヲ度トスシ置テ其中間大約一指
横徑計押サレ様ニ施スベシ而其上ケ
三卷木綿法ヲ以テ緊定スベシ○凡膊

骨頭及其近傍ノ損傷ハ先ツ裂綻シタ
ル押木帛ヲ挾シ其他部ハ通例ニ纏縛ス
ベシ○其下端ニ有アル損傷ハフック傳帶
ヲ施スベシ○此フック傳帶ハ適宜ノ箇サ
ノホルー紙ニ葉ヲ以テ押エ以テ其上ノ二
三ノ傳帶ヲ施スベシ○凡此等ノ損傷ニ旋
テハ下腕ハしールデ首ヨリ帶ヲ掛
テ腕ヲ釣ク置テニ懸心ベシ
○此しールプノ斜メニ少キ損傷ニハ強シテ
上ニ引上ケ置メシ○若シ其疵斜メナリ

氏大ル中ハ弛メ下クメシ○凡此等ノ損傷ニ
旋テハ又ヲ横ニ動テ勿レ若シ不慎ハ亦
離脱ス

第十五章 前腕諸骨損傷

此前腕損傷ヲニニ區別ス○其單症者ハ只
一等損傷シタル者也○其複症ハ二骨共ニ
折傷シタル者也○此症ハ單症複症共ニ手
ヲ以テ腕ヲ前後ニ動ス中ハ其骨吃吃スルヲ
以テ知ルベシ○凡テ此骨ノ折傷シタルハ常

ニ其全平ナル骨ニ向テ折避スル者ナリ○此
等ノ損傷ハ單履ニ症共ニ必ス治ト虽凡
外面カ内面ニ拘不正スル者ナリ故医注意
メ先ツ是ヲ患者ニ告_レ所ス_レメシ○一等ノ損
傷ニ單履アリ而折傷シタル骨カ位置ヲ
失タルモアリ或不失モアル如クニ治法モ
亦異ナリ別テ其兩刀引伸スルニ區別ノ
術アリ○若シ小肘骨ノミ折傷ノ大肘
骨ノ方ニ向テ避去シタルハ医先ツ患

者ノキヲ以テ大肘骨ノ法ニ拘曲セシム_レシ
○是小肘骨ノ下ノ部ヲ揚上セシメニカ為
ナリ少メ医已カキヲ患处ノ側ニ置テ下
腕ノ内外面ヲ押推ス_レシ如此スルハ其内
外上面ノ諸筋カ兩肘骨ノ間ニ入テ骨ノ
内ニ避去セシム却テ之ヲ除去シメテ以テ
治ス_レシ○若シ大肘骨ノミ折傷シ小肘
骨ハ平全ナル中ハ其手ヲ反テ小肘骨ニ
向テ拘曲セシメ同ク赤筋ヲ推押ス_レシ○其

複症損傷ノ者ニ控テハ引伸術ハ即チ其ハ
筋ノ條理ニ隨テ引伸スベシ必ス筋理ノ
矣擾セサラシムベシ其術ハ下腕トテ頭ヲ
曲ラ而メ下腕上頭ヲ一人ニ持合手セシメ又
前腕横紋ノ処ノ上エノ方ヲ持テ引伸
セシメ常法ヲ以テ患処ヲ改処ニ復納
セシムベシ○此等ノ種差ノ傳帶ハ唯裂裂
決シタル押木綿ヲ以テ患処ヲ纏スベシ
○其内外端ニハ最モ厚キ押木綿ヲ置キ

○此木綿ノ長端ニ廣闊ハ上ノ押木綿ト同シ
○此木綿ノ上ニ三所共ニ各木ヲ以テ製衣々
ル控手ヲ置キ只其長下腕ニ準テ且其ハ
闊サ腕ヨリ少闊クシ十分ノ木綿ヲ以テ
之ヲ傳シ最モ手頭ニ至ル迄之ヲ傳スベシ
其手ノ階処ニハ先枕木綿ヲ填充し指ヲ
メ少ク拘曲し物ヲ拘スル計ノ度ニメ傳纏
スベシ○其傳シタル後モ腕ヲ余リノ多ク
不曲亦余リ少クモ不曲メ手モ前後ニ傾

カサル様ニ腕ヲシールフニ懸テ置メシ〇凡
テヲレカラノシ骨ノ損傷ハ此折傷ハ全
本故復ス腕ヲ
真直ニ伸メ指頭ヲ以テ之ヲ接着シ其上ニ
厚キ環状押木綿ヲ置キ而刺絡ノ中ニ
用ル傳帶ヲ施シ而其伸久ル腕ヲ緊定
メ暫ク布枕上ニ安定シ而能ク調理メ復
患者ノ腕ヲ少ク動搖セシムメシ是三頭筋
ノ延蔓セシ筋根ノ縮屈セシヲ恐テ也

第十六章 前手諸損傷

此症ハ前手骨カ一骨或ニ三骨モ損傷セ
ル者也〇其單症ノ者ニ於テハ察得テ難シ
〇其複症ノ者ハ鈍器或鳥銃等ニ因テ此
ノ傷ヲ被フルモノニメ危篤ヲ傷症ヲ兼者
也〇此症ノ損傷ハ向々腐骨或關節強直
或痿漏ホラ発起スルナリ此傳帶法ハ其
傷症ニ隨テ各種ノ法ヲ用メシ
第十七章 後手諸骨損傷
此症ハ骨損傷ニ有ル処ノ諸症徴ヲ現ス

ルヲ以テ知リ易シトス此治術傳帶法
ハ他ノ此等ノ如キ骨但ノ部方ノ損傷ト同
シ

第十八章指骨損傷

此單症者ハ探的シ及音響ヲ聞キ又痛
有ヲ以テ知メシ○此單症ハ凡ソ二十日過
テ治スベシ○虽然骨ノ片碎シタルヲ有者ハ
甚タ危篤ノ傍症ヲ発ス則死痺或強直
ス是因テ間切斷スルヨリ他良術ナキ者

ナリ○此單症治法及傳帶法ハ他ノ圓
柱形ノ諸骨損傷ト異ナリ

第十九章股骨損傷

此症ハ其正中或上端及下端或首頭ニ在
ルヲ有リ○其徵候ハ即其處痛ミ音響
ヲ為シ其形異常及動モノナリ又斜ニ折
傷有片ハ却テ短クナル也○凡テ此損傷ハ
全治スル迄ハ少クモ五六十日許モ怪メシ
○斜ニ折タル者ハ跛トアリ而後症ノ

者ハ甚ク危シ

此治療ハ甚難ト是凡次方ヲ用メシ〇總テ
股ノ諸損傷ニ於テハ他ノ傳帶法ヨリハ
フツク帶ヲ用良法トス

此ノ接タル股骨ハハブフツキ鉄枝ニテ長履
帛千靴固ノ如ク膝下ニ至ル迄ニ製シ用ヒ
或之カ爲ニ古昔ヨリ製衣造シタル器械ヲ
用ヒ或廣キ板ニ枚用ヒ此板ハ外面臍
骨ヨリ膝頭ニ至リ其ハ股ヨリ内

膝頭ニ至リ其上ヲ傳帶スメシ〇此骨ヲ
接片ハ元接タルヲ緊定スル片ハ股ヲ曲テ
外邊ニ向テ平居セシムヲ要用ナリ最
モ斜メ折レタル者ハ此法取急要ナリ

第二十三章 股骨頭損傷

此症ハ其質海綿状ニシテ其位置斜ナル故ニ
動スレハ折傷シ易トス〇此コロテタライニ
大ナル回轉スル者ヲ云フ或膝ノ關節ヲ墜テ損スル中ハ常ニ
此ノ股骨頭ノ損傷ヲ致ス〇此症ヲ診察

スルノ法ハ其一折傷ヲ被タル骨カ平全ノ方ニ
比較スレハ即短ク其ニコロテタライエル日常
ヨリ高起シ外面ニ突出ス其三其足ヲ以伸
テ之ヲ引片ハ其尻肉高起セシモノ隨テ減
シ其ハ長サ平等ニ為ナリ其四上件ノ如ク
伸セシヲ弛ル片ハ反テ又高起シコロトダラ
ーイエルモ又突出テ其足已前ノ如ク短
縮ス其五膝ト足路カ内面ニ反倚ス其六
平全ノ方ノ股ヨリ外ニ向テ之ヲ屈内用カニ

トスレハ即甚ク痛ミ又内面ニ向テ之ヲ引
寄ル片ハ痛隨テ減ス其七強ク股ヲ動
片ハ少ク言ヲ為者也

○凡ソ此症ハ治法ヲ施トム由氏六七日^{四十二}_{日ナリ}
ヲ怪テ皆跛蹇トスルナリ此治療ハ先患
者ヲ床上ニ仰臥セシメ二人ニテ之ヲ引伸
スレシ○其傳帶法ハコイルニアイルヲ用メシ
而其足ハ上ニ説タル如ク曲テ外邊ニ向テ
平居セシメ置メシ

第二十一章 膝蓋骨損傷

此症ハ其損傷シタル骨ノ堅ニ有モノ或又
横ニ有者之〇此症ノ因ハ高ヨリ墮テ膝ヲ
屈テ其蓋骨ヲ緊ク横テ又ハ重キ者ヲ
擔荷ヲ蹶跪メ之ヲ撲スル等ナリ〇此症
徴候ハ疼痛及膝ヲ動スル不能者也〇此
ノ損傷ハ堅ニ有者ヨリハ横ニ在者多シ
〇其横損傷トハ其折タル處兩方ニ離去シ
或足ヲ動スニ痛有等ヲ以テ知メシ

若シ膝蓋骨面連ニ腫起發スルハ此症ノ
大ナル妨碍ナリ〇其單症ノ者ハ格別ク危
ナシ〇其ハ横折傷ハ堅ニ有ヨリハ接癒
シ居テ難ク向ク跛トナリ屈伸シ難ク至
テアリ臆或靱帶ノ衰弱スルテアリ而
蹶シ易者トナル也〇此横損傷ノ治療ハ
其一先ツ足ヲ以テ能ク直伸スルニ
其二上ニ有者其半骨ヲ以テ指ニテ勉テ下ニ
押下メシ〇其ハ堅損傷ニ於テハ其位置ヲ

失フテ無カ故ニ接術ヲ施スニ不及〇然
凡フルエトニテ傳帶ヲ用テ緊要ナリ
〇其損傷ニ於テハ固去シタル骨キヤステシ
ト名ル器械ヲ以テ両方ヨリ着合シ置
メシ〇此傳帶ハ七十日モ持久シ繃纏し
置メシ而十日毎ニ之ヲ卷替メシ〇其卷
替ルノ間ハ其骨カ再固去スル為ニ之ヲ
指ニテ緊ホ定シ而其指ニテ緊ホ持シ徐
々横ニ動移運轉セシムメシ或人説共セ

リ〇然凡三七日モ経ル迄續キ用ル中ハ
十分ナルヲ予之ヲ經驗セリ〇此ノ日數
ノ間ニハ緊接シ屈ノ成リ難キヤウニ十
七モナシ〇予爰ニ畧々説アリ凡テ此
損傷ハ初癉腫起アルカ故ニ先ツ最初ニ
只足ヲ伸シ傳帶ヲ寬ク施シ置メシ〇
此傳帶ヲ不絶ミニタミノ精文二十四
本四十八本ヲ混交シテ浸淫スメシ

第二十二章 腓骨 脛骨 損傷

此單症ノ者ハ骨片ニハ全ク不妨メ唯一部分
ニ疼痛及音ヲ為テ以テ知テ得メシ

○此症モ亦上端及中又下端ニ有者アリ
○其下端ニ有者ハ其端脛骨ニ向テ垂
矣スコト髌骨ノ上面カ内踝骨ノ方ニ
向テ反矣シ其足ノ踏ム処内邊ニ向テ屈
ス○其損脱シタルヲ連ニ故処ニ復納セサ
ル中ハ終ニ治ヲ治スニ難シ而常ニ内踝
骨ヲ踏テ歩行スル様ニナル者ナリ

故ニ勉テ速ニ手術ヲ盡内ニ向テ垂矣
セシ骨ヲ外ニ向テ押排シ踝骨ノ内ニ適
宜ノ傳帶ヲ施メコト骨ノ内去セザル
ヲ防クメシ

第二十三章前所諸骨損傷

此症ハ挫傷急定等ニ依テ致ス者ナリ○
此ノ諸骨ノ中ニモ跟骨最モ折傷シ易ク
而メ此症ハ脛腓筋ノ屈縮スルカ故ナリ
其折傷処カ内裂スル也○若シ足ヲ動力

ス中ハ痛ミ及音向音アル中ハ則知メシ
此單症ニハ環狀傳帶及複症ニハブツク傳
帶ヲ施メシ

第廿四章十後跗諸骨損傷

此症ハ單複症モ手ノ諸骨損傷ト治方
同シナリ

第廿五章手諸骨損傷

此症モ亦手指ニ同シ矢多考スメシ

第三雜病部

第一章諸骨片碎

此症ハ骨ノ實體カ少ク片離スル者也○此
ヲ區別スレハ視症ト不視症トノ二種アリ
即其(一)視カ及ヘキ者則是ヲ見テ知○
此症ハ骨創ニ乳香精ヲ用中ハ則治ス
其(二)視カ不可及者其創傷ノ破リタ
ル部久ク煖痛ノ膿腫ヲ催スヲ以テ知
メシ此術ハ刀痕ヲ為メ剥キ其骨ヲメ

雨路出せしムル一階亦要ナリノ

第二章 諸骨剥露

凡骨ハ骨膜ヲ剥脱セシ中ハ空氣或膿或
菜油ノ爲ニ及テ腐肉枯ヲ致ス者ナリ

此治療ハ剥露セシ骨ニバルサム様ノ品ヲ
附貼メ能ク被露スヌシ就中没菜或乳
香精等ノ色浸最モ良ナリトス

第三章 骨創

此症ハ骨骸露症ト同治也○其射創ハ

骨ヲ片シ或摧碎スル者ノ故ニ危篤ノ
言方症ヲ發ス因之直ニ刀ヲ取テ創口ヲ
切り開キ片骨ヲ除キ去リ其跡ハ乳香
精ヲ貼メ傳スヌシ

第四章 骨ノ実体缺欠

凡骨ノ実体ヲ失フ一ハ一ニテレパアニヲ施スニ
由テナリニ折傷骨ヲ除去タル者ニニ腐
枯シタル骨ノ片タル者○又時トメハ甚大ナ
ル骨ノ片落シタル創蹈ヲ自然ノ良能ヲ

以テ故ノ如ク生瘡スルコトアリ○若シ自然
ノ良能弱ク乏シ或全ク自然ノ力能無クハ
和ラカナル刺戟劑或は毒ノ色侵或ユオホ
ヒムノ色侵ヲ貼ノ自然ノ能カラ援メシ

第五章骨腐枯

此症ハ骨ノ実体カ缺欠スルナリ○此症ヲ
區別スレハ一

其一全キ腐骨是ハ骨色トナリ或黃或蒼
色或淡黒色トナル者ナリ

其二外面腐骨是ハ骨ノ外面ノミ腐レタル
者ナリ

其三内腐骨是ハ骨ノ内ヨリ腐肉起ル者ナリ
之ヲウ井ドトルニト名クルナリ其外面腐骨
ノ伏肉ノ中ニ在ル者ナリ○其隠伏症腐
骨ヲ見サシルハ先其海綿状ノ肉ヨリ
黒色ニメ臭氣アル膿ヲ出し消息子ヲ押
入スル中ハ骨ノ組織ナシヲ覺ル者ナリ○
凡腐骨ヲ治療スルニハ

其一 腐リヲ限局メ止防スベシ
其二 已ニ腐タル部ヲ健壯ノ部分ヨリ
去セシムベシ○其骨ノ腐ヲ限局メ止防
スルニハハルサム様ニメ腐敗ヲ止ル品ヲ用
ベシ即乳香精及莖色浸或霸王鞭色
浸又乳香末ニカニフルヲ合シタル品劑等
ナリ○其腐タル部分ヲ健康ノ部ヨリ
除去セシムルニハ是自然ノ良能力之ヲ
為スし或ハ術ヲ用モアリ

此治療ハ

一 其骨ノ腐敗シタル部水様ノ魚肝劑
ヲ塗ベシ即猛水或銻酸或樟腦腐蝕
油等也

其二 真ノ魚肝劑ヲ以テハ

其三 大針或ペルソラチーフテニバア
ニヲ以テ錐
穴ヲスベシ

其四 エキソラチーフテニバアニヲ以テ
刮剥スベシ
其五 鑿ヲ以テ刮剥スベシ

六 鋸ヲ用メシ

凡 筋蓋ハ両ターフル係タル腐骨ハ多クテレ
パアニヲ施スベシ〇其施手ハ腐タル部ノ
周圍ニ半ハ健康ノ部ニ係テ錐穿し去
メシ〇凡 關節部ノ腐骨ハ其部ニ切斷ス
ルベシ其故ハ腐肉枯ノ部ノミヲ去難ケハ
ナリ其隱伏ノ腐骨ハ刀或魚枯劑ヲ
用テ其骨ヲ鯨兩踏セシメ以テ治法ヲ施
スベシ〇若シ諸般カ其質性ヲ失ヒタル

ヨリ致ス症ハ内外ヨリ液ヲ良液ニ復
セシムノ方ヲ施メシ〇然レ別メ極皮
ヲ施スベシ

第六十章 ウイニドトルニ

此症ハ骨ノ腫ニメ肉ノ部モ共ニ腫シ骨
肉腐枯ヨリ致ス然レ時トメハ骨膜ヨ
リ発起スル者ナリ〇此症ヲ區別スハ
其一初発ノ症是ハ深遠ナル骨痛アリ
テ外部ニ腫レナク赤色ノ小班ヲ発ル者也

其二全成症此ハ外面赤色ナル海绵状ニ
メ丸キ甚痛腫瘍アリ

其三既ニ破潰セル症此レハ患所ノ上面ニ
小口ヲ數所ニ開破シ此ヨリ液け日々
多ク出ルト魚氏其腫不減而海绵状
ノ肉アリ之ニ筒自子ヲ押中前骨ノ腐
枯タルヲ知ナリ○此ウイニドトルノ起ル
所ハ多ハ前手前足ニアル海绵状質ノ
処ニ辛辣液ノ溜儲シタル者ナリ

此症ハ小兒ニ多メ高年者ニ稀ナリ
此治療ハ分鮮劑或刮割劑術ヲ以テス
其初発症ハ適宜ノ分鮮劑ヲ腹メ分鮮
スルシ外用ニハ水銀膏内用ニハシキユター
水銀及鴉皮ヲ共フメシ○其全成症ハ緩
和劑ヲ以テ破潰セシメ而後腐蝕樟腦
油ヲ海绵状肉ヲ去リ又腐肉骨ニハバルサム
様ノ者ヲ施スル○若此疾患ヲ自然ニ
任テ弃置片ハ三二年ノ后其腐シタル部

分自ラ枯落除去スル者ナリ

第七三章 骨痛

此症ハ骨ノ実質ニ於テ必定ノ痛有ラ
云〇此症凡テ一骨中ノ一部ニ在テ一
骨全体ニ在テ稀ナリ而多其部分
一処ニ限リテ処々ニ定痛スル稀ナリ
此症ハウイニトニカルクポイル及其他ノ
骨腫ヨリノ致スナリノ或骨ノ挫傷ヨ
リ起ル者ナリノ〇此症ノ所在ハ骨髓

膜或内外ノ骨膜ナリノ〇凡骨肉多ハ
此骨痛ヨリノ起者ナリ

此治療ハ初発ニハ止痛劑ヲ試用スシ
〇若シ此方ニテ無功痛増劇シ已ニ骨ノ
府肉タル中ハ其部ヲ割開ノ骨ヲ露出シ
テレバアンヲ施ススシ

第八三章 骨フロースヘイト

此症ハ骨質自ラ脆枯メ摧碎シ易ナル
者也〇此原因ハ骨髓ノ乏クナリタル

者ナリ。○此症ハ都テ年老梅毒壞血病
腐骨疽及其他ノ原因不能得知者ヨリ
致ラマリ。○又時トメハ只一骨ニアル者
アリ。又一身總骨之ヲ致ス者アリ。
○或無理ニ打擲等ヲモ不為骨損傷
摧碎スル中ハ此症ト知ル又シ。○此骨損傷
其因此症ヨリ致者ハ他ノ骨損傷ト同
治法之。○然レ骨ノサツク。其治スルハ
其因爲ルノ症ヲ各種ノ通劑ヲ以テ之

ヲ防治ス。然トモ其各種ノ通劑
ニモ皆粘液様ノ品ヲ加テ用。又シ

第九三章 骨脆軟

此症ハ壯年ノ者ノ堅骨恰モ軟骨ノ如
ク拘撓ス。又キカ如ク軟弱ニナル。有是モ
又只一骨ニ致スモノアリ。數骨ニ致スモ
ナリ。○此ノ原因ハアニケリヤ病梅毒酸
敗血骨液ノ油状或水様ニ變シタル者
或水銀或醋或ミウルコール ミ子カールミウル

ノ誤用タル者或湯ノ蒸気或灰塩或
白灰水及湿地腐骨疽ウイニドトルニ。
カニクル様ノ辛辣気等ニ皆骨ヲ脆軟ニ
スル者ナリ。○此症ノ初発ニハ甚骨痛
シ其痛則骨脆軟ニ為ル中ハ止者也。○
其脆軟骨ノ亦後ハ他ヨリカヲ不假只
其部ノ筋力ノミニテ自在ニ拍撓スルヲ
ヲ得ナリ。○又小便白灰様ノ滓生テ
通ス。○其齒ハ此病ニ不物者ナルカ故ニ

脆軟スルヲナシ。○其他ノ骨ハ微ク抵觸
メモ忽折傷シ易ナル者ナリ。○凡テ此症ハ
不治ニメ遂ニ死ニ至ル其已ニ死ニ至ルトス
ル前ニ亦劇痛ヲ発者也。○此原因種々
アリ。又其因トナルノ辛辣氣モ又種々アリ
リ故ニ治法モ各隨テ適治ヲ施スベシ何
ソ定法規則ヲ為テ得ニ

第十三章 骨不具

此症ハ不具ニ説共セリ

第十一章 骨腫

此レ骨ノ実体ニ起発スル者ナリ○此症ヲ區別スレハ

其一 エーニライトリス骨瘤

其二 カルクホイル瘤ノ類

其三 ゴムケスウキル脂膜ノ腫瘍

其四 骨端ノ腫起スル者

其五 肉骨腫等ナリ

○其瘤ハ骨ノ実体ノ腫起スル者ナリ

○此徴候ハ骨ニ固着スル硬腫ニメ堅硬不動ナル者也○此ヲ區別スレハ

其一 善症ニエーニライトリス此ハ外因ヨリ起発スル者ニメ疼痛ナキ者ナリ

其二 悪症ノ者此ハ内因ヨリ発起スル者ニメ疼痛甚ク而色変スル者ナリ○

其善症ノ者ハ治療ヲ怠慢又ルト多ク妨害ナシ○其悪症ノ者此漸次ニ腐

骨ト変ス○若し梅毒ヨリ起原スル者

ニメ未夕初癸ノ頃ナラハ内外ヨリ水銀
劑ヲ用ヰシ

外科新書卷七終

外科新書卷八

遠西

雅骨弗斯不冷吉

撰著

西肥

永保吉雄權之助

譯述

エオホルビユム 色浸方

羅葡エスセニチヤエオホルビユム

骨木指トヲナス

霸王鞭煎エオホルビユム

ハギ

火酒九十六匙

右ニ味合硝子土壘ニ入レ色浸メ慮メ用

□諸般ノ潰瘍瘻瘡ヲ治ス

乳香色浸

四羅甸 エスセニヤール マステルキナー

乳香 八匁

火酒 九十六匁

右二味色浸如前

〔外用治痰管癭内服諸般閉塞病ヲ

治ス尚腐内骨疽ニ貼シテ腐肉ヲ除ス

没薬色浸

甸エスセニヤール

没薬 細末 八匁

火酒 九十六匁

製法如前

ルイタ 酢色浸

甸マセーチムリクター

芸香 剉 八匁

上好醋 六十四匁

右二味合硝子搗云ニ入密封メ大陽並

トシ二七日ノ慮用

腐蝕樟腦油

甸オハリヨムカウス テキムカニフラー

樟腦 細末 九四匁

硝石精 六十四匁

右二味合硝子搗云ニ入密封メ微暖ノ処ニ

安定メ樟腦既全ク烱化メ而其上澄

ノ油ヲ取テ貯フ

エーテニヒユルグのハニ。ウラシドバルサム方 旬バルサモスタラウマテ
イキユスエーテニヒユルグニ

安息香 バルサムペーリユー各八匁

薑薑會 未十六匁 火酒 九十六匁

右合メ器ヲ砂中ニ埋ニ三日色浸し

テ慮用

エンプラーストアトリユヒヤム方

カラリーカムテユリシカーリカム トルクユ国
ニ産没食子

玉乳香 以酢解之者 ヒリーデスアリス 各九十六匁

上品テレメンテイニ油十六匁 荖膏 麦粉 八匁

松香 世ニモコミナシ 或云薰陸

右混合メ膏ト為し用

カニテリクラーレユヒユウツト

黄蠟 六十四匁 テヤキロム膏 十六匁

右合メ微火ニトセ間断ナク攪合膏

トナシ冷之以下数百字アリノ不能讀之

エキストラクテユムサナルニ一方 ゴララル、和蘭コルドライトトシキセル

金爐糟 九十六錢 或銀密陀僧 好醋 二百八十八錢 或百九十二錢

右ニ味合メ陶器ニ盛リ微火ニ上セ木篋ヲ以テ間断ナク攪合者テ半ヲ減シ漚過テ用ユ

○外用メ眼瞼水泡尿管癢大背息肉打撲挫傷青斑或炊熱腫痛ヲ治ス

乳香精方 旬スプリーチヌスマステユツトユス

乳香 三錢 火酒 八錢 野薔薇露 四錢

右ニ味投長頸コルプ者テ野フ

石鹸精方 旬スプリーチヌサボナシウス

ロイツマレイニ精 百八十八錢 樟腦 二錢

サルアルモニャーシー十錢 へ子千ヤ石鹸 四十八錢

右ニ味合メ用

ゴムアフテイフクイツキ方 旬メリキニリスモリス

浄生水銀 一匙 ヲラヒヤゴム 三匙

罌粟蜜 五分

○ 青竜乳ハ此方中ニ牛乳微火煮者六十四匙ヲ入ル
主治 喉疾閉塞ヨリ発スル喉腫眼ヲ洗ヒ又包皮腫咽喉炊
腫疼痛者ニ含嗽劑トス

右合メ石臼中ニ於テ精研シ水銀已化ラ
度トス

カニフルスレーム方 旬 ムシラーブーカニララデー

樟腦 十六匙 粘稠 ヲラヒヤゴム 溶化粘稠ナル者九十六匙

右合調勻

外用シヘニスバルサム方 旬 バルサミニスヒーターエキステ
ルニム

勿耨茶石鹽 九十六匙 テレメニ油 百八十八匙

酒石塩 廿四匙

右三味調勻

主治

ロイツ散方 旬ヒルヒスアドエローニペラス

蕎麥粉 四十八匁 樟腦 火酒ニ入テ研右

「ケレーター」西洋産 白炭 赤石脂 十六匁

白堊 三匁

右五味混合調勻

主治

愈瘡水

水銀分離水方 旬アーキウホルテユスメリキリヤリス

生水銀 猛水 各八匁

右ニ味硝子白中ニ研合水銀烱化メ

盡ヲ為度

主治

「テイデシ。ウラントワートル」方 旬アウキエリテライヤリ

酸模雨露水 火酒 各二百八十八匁

丹岩精 九匁 白糖 九十六匁

金公水

右四味調勻器ニ入暖処ニ置ギ色浸
スル一八日慮過用
主治

銀燼精水方

阿ワクワ人ヂトノミ子ラーリス
蘭コドワテルハニゴウラド

泉 百九十六圭

五キス夕ラクトサチユル

火酒 各四圭

右三味調勻用

○主治外用ノ眼瞼疫毒腫麦粒腫電

腫赤爛波刺癢痒外及大眦腫瘍瘻肉
白膜疫毒腫淡出不止角膜膿疱曇暗
爛腫疼痛ヲ治シ兼テ折撲傷青班諸
般爛熱腫瘍凍瘡火傷腺腫癰瘡疔
ノ諸病ニ切アリ

外科新書卷八終

八量記

「ゲレイシ」一厘六毛
六六三當 六十分一

「スクリズ」三分三厘
三毛三 三分一

「ダラクマ」一毛
則チ刃先アルヲ三ツ
合カモノ一毛ノ強マ

「ロド」四毛或半「ヲニス」トモ云

「ポニト」九十六毛

「ヲニス」八毛

「ロツトル」ダムポニト「百二十八毛

「ピニト」百六十八毛 水将ヲ量ルニ用ユ

